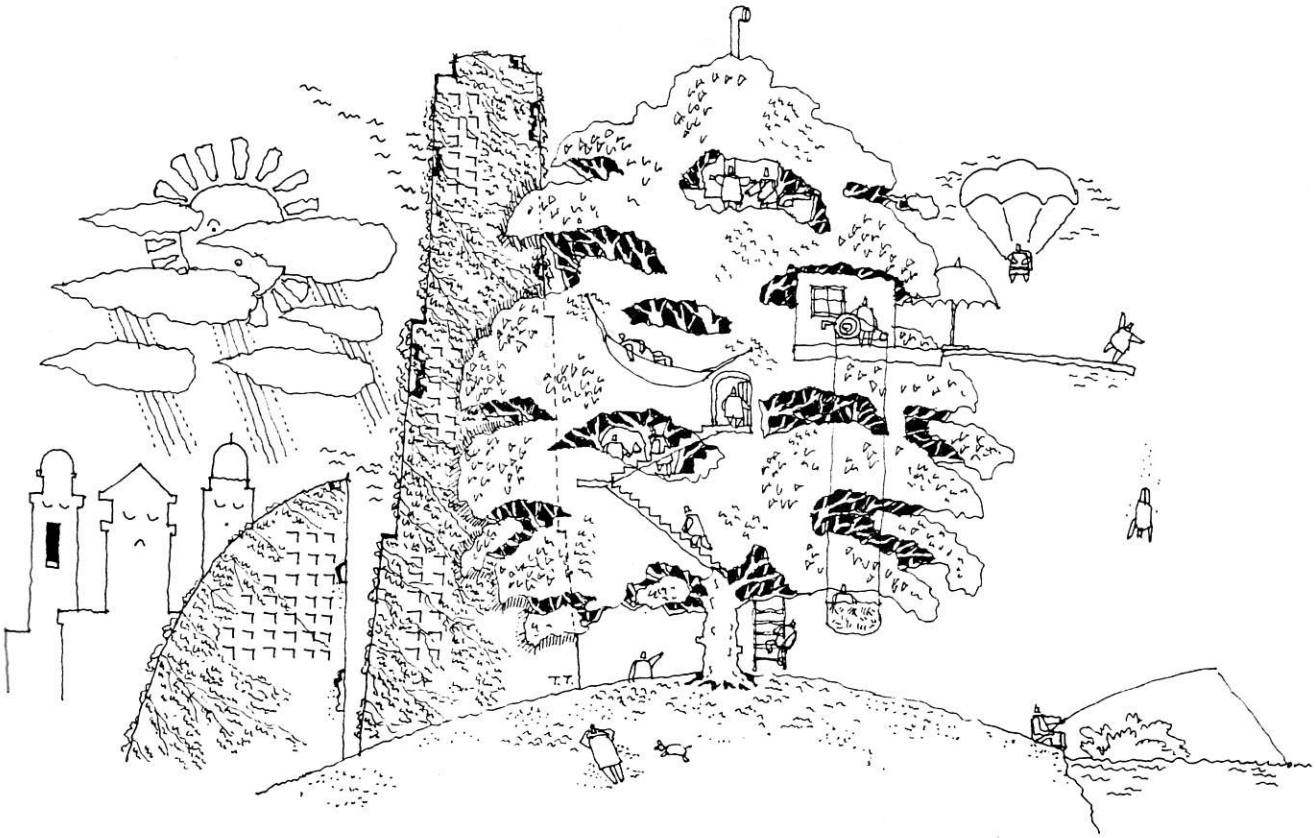
「まち研」1995年４月

横浜まちづくり研究会１５周年記念誌



「まちづくり研究会」は１９８０年３月に横浜市役所の若手職員の勉強会としてスタートしました。月１回の定例会の開催を基本として，都市問題や横浜市政の勉強を中心にさまざまな活動を繰り広げてきました。「まち研」は入会資格は設けていませんので誰でも「街づくり」に興味があれば参加できる会です。そして，参加者のネットワークを広げることで，知識や仕事や生活も広がっていきます。

「まち研」にはどういうわけか会長はいません。会員全員が主人公なのです。現在の会員は約２００名です。毎回の定例会に出席する会員もいれば，会報を読むのを楽しみにしているだけの会員もいます。

今年，「まち研」は１５周年を迎えました。何度も存立の危機に直面しつつも，人がいて，人の住む街があって，街づくりの続くかぎり，「まち研」は何とか活動を継続してきました。会員それぞれの街づくりへのかかわりあいが，「まち研」の活動の基礎となり，時代が変わっても，その時代にあった活動スタイルで今後も継続・発展することを願っています。

目次

◆まちづくり研究会創立 15 周年にあたって思うこと
田村　明　2

◆まちづくり年表　3

◆活動報告

ロスアンゼルス・サンディエゴ　8

上海・蘇州　9

ペナン・クアラルンプール　10

ｉｍｉｄａｓ　11

現代都市読本　11

横浜水際会議　11

教文セミナー「まちづくり教室」運営顛末記　12

赤煉瓦ネットワーク創造（騒動）記　14

◆ 15 周年に寄せて　会員からのメッセージ　15

◆資料

まちづくり研究会創立１５周年に当たって思うこと

田　村　　明

私が横浜市を退職して１４年になる。まち研は創立１５年で，１年先行だ。私が市を辞めようと思っていたころ，若い人々が自主的に勉強する機会があればと願って生まれた「まち研」が，今日まで続いてきたことは率直に嬉しい。こうした自主研究会の継続はなかなか難しいが，ささやかではあっても，ずっと続けてきたことは誇りにしていいだろう。

中心になる人々の継続する意思と努力，そして，少しづつでも若い人々がこれを受け継いできたからだ。ここまで来たのだから，是非今後も続けていって欲しいし，いつも新しい人々が加わり，前からの人々と一緒になって会を活性化して欲しいものである。

「横浜市のまち研は，ただの研究会ではなく，アウトプットも出しているよ。」というと，びっくりする人もいる。「イミダス」もすでに９回出た。最初の一回は，どうなることかと心配したが，二年，三年と確実に進歩した。いまは自主的にやれるほど成長した，始めの頃を考えると隔世の感がある。

一昨年に「現代都市読本」にも協力してもらった。これはまだまだだったが，人間はやっているうちに必ず成長する。死ぬまで進歩するし，その意思がなくなれば，年齢が若くても，そのときから退歩する。まち研は，都市のこと，自治のこと，“まち”のことに興味をもつ人々を，いつも若々しくさせてゆく会である。“まちづくり”の研究の内容は無限だし終わりはない。

まち研から生まれて実践的な全国ネットワークになっている「赤煉瓦ネットワーク」に一生懸命の人々も出てきた。これも，いいではないか。研究だけではなく“まちづくり”の実践に市民的にかかわろうという動きだ。まち研には，いろいろな人々が共存してよい。ただ，せっかく一緒にやってきた人々が，最低限の原則で一致していて欲しい。それが，「まち研」はマチ社会であって，ムラ社会ではないところだろう。

私が「地域づくり」つまり“まちづくり”プランナーになろうと決心したのが３５歳，実際に始めたのは３６歳になっていた。このときに０年生になって始めた。他人よりもはるかに奥手だが，そのかわり，幾つになっても興味がなくなることはない。昨年１０月，準備委員会から１０年も勤めた自治体学会の代表を辞めた。今度は，昨年５月にはるかに小さい「まちづくり学会」を初めて会長になった。先行きは分からないが，将来「まちづくり大学」を作ろうと話は大きい。７月には「パブリックアートフォーラム」が生まれ，代表幹事を勤めている。“まちづくり”にお役にたつことは，今後も続けてゆきたい。“まちづくり”を勉強したり関わりをもつと，年齢は忘れてしまう。

私の体験からいっても，まち研は，皆さんの若さを維持してゆく会として，お勧めしたい。人間とは，ほっておくと年齢よりも気持ちが退化し，硬直化してゆく。それを防止するには“まちづくり”研究は，一生楽しめる課題だ。とくに自治体職員にとっては，職業でもあるのだから。

昔よくまち研に来ていたが，いまは役所や家庭に浸っている人もいる。それぞれ事情があるのだろうが，なにしろいまの人生はまだまだ先が長い。あまり老け込まないで，ときどきは顔を出して貰いたいものだ。私よりずっと若い人たちなのだから。

それに，戦後５０年の精算として，長年言われ続けてきた「地方分権」が改めてクローズアップされてきた。本当の分権を可能にするには，その担い手である自治体職員の質による。自由な発想と，生き生きした市民性をもつ職員が育ってほしい。まち研ではそういう人々が育つことを期待したい。

まち研は，未来の自治に繋がるし，そこに参加する人自身のためのものでもある。■

まちづくり年表

年 月 日	まちづくり研究会の活動	ヨコハマ及び世界の出来事
'90. 3，10	『まち研』10周年記念フォーラム 田村氏，檜槇氏，大田氏，東氏， 寺田氏，田口氏	3，11 リトアニア独立宣言 ，15 ゴルバチョフソ連初代大統領 ，22 東証3万円割る
4，3	ー会員自主研究発表ー 横浜の交通を考える　環境事業局 小川氏	，30 エストニア独立復帰開始宣言 4，1 大阪花博開幕(～9/30)
5，16	ヨコハマの文化の風景　金沢区役所 仲原氏	，9 横浜市長 高秀秀信誕生
6，27	みなとみらい２１地区の 生活像を語る会 マサキオフィス 竹森氏	，17 ソ連，リトアニア経済制裁へ 4，28 バルセロナ展開催(～7/1)
8，9	鶴見・神奈川臨海部の魅力づくり 鶴見区役所 三宅氏，畠氏	5，4 ラトビア独立回復宣言 ，24 訪日韓国大統領に天皇が「痛惜の念」
9，12	横浜ゆかりの建築家 (和田順蔵と雪野元吉) 港北区役所　古田氏	，29 ロシア最高会議議長エリツイン 6，10 ペルー大統領にフジモリ
10，25	横浜・舞鶴・赤煉瓦ネットワーク (歴史と文化に根ざした個性的な街づくり) 内藤氏，仲原氏，斎藤氏	8，2 イラク軍クウェート侵攻 10，3 ドイツ統一
11，25	※赤煉瓦シンポジウムin舞鶴 東京大学　西村氏他	10，11 飛鳥田元市長死去(75歳) 11，8 MM21，24街区TRY90グループに決定
12，17	テーマパークと地域活性化 都市計画局　石田氏	12，9 ポーランド大統領にワレサ
'91，1，19	相模原散策ツアー	1，1 東京03局内電話局番４ケタに
3，26	横浜の国際交流センターを考える 総務局　茂木氏，荒木田氏	1，17 多国籍軍イラク空爆開始 3，14 広島橋げた落下事故死者14名
4，19	現場からの第２次ゴミ戦争報告 環境事業局　小川氏	，19 成田エクスプレス 4，1 牛肉オレンジ輸入自由化
5，8	もうひとつワンランクアップ講座 ・首都圏の中の横浜 横浜市大 中島氏	，24 地価税法可決 5，8 育児休業法成立
5，14	・自治体とはなにか 法政大学 田村氏	
5，21	・企画・立案・意志決定と プロジェクト 都市計画局 北沢氏，緑政局 北村氏	6，3 雲仙普賢岳火砕流で死者43人 ，17 南アでアパルトヘイト法廃止
5，28	・予算・経理運用の基礎知識 企画財政局　大澤氏	
6，4	・国の各省庁の組織と各種 プロジェクトの基礎知識　南氏	
6，11	・区役所のプロジェクト 港南区役所　坂和氏	
6，18	・知る人ぞ知る，よこはま２１世紀 プランの読み方 建築局 石阪氏，トーヨコ 田沼氏	

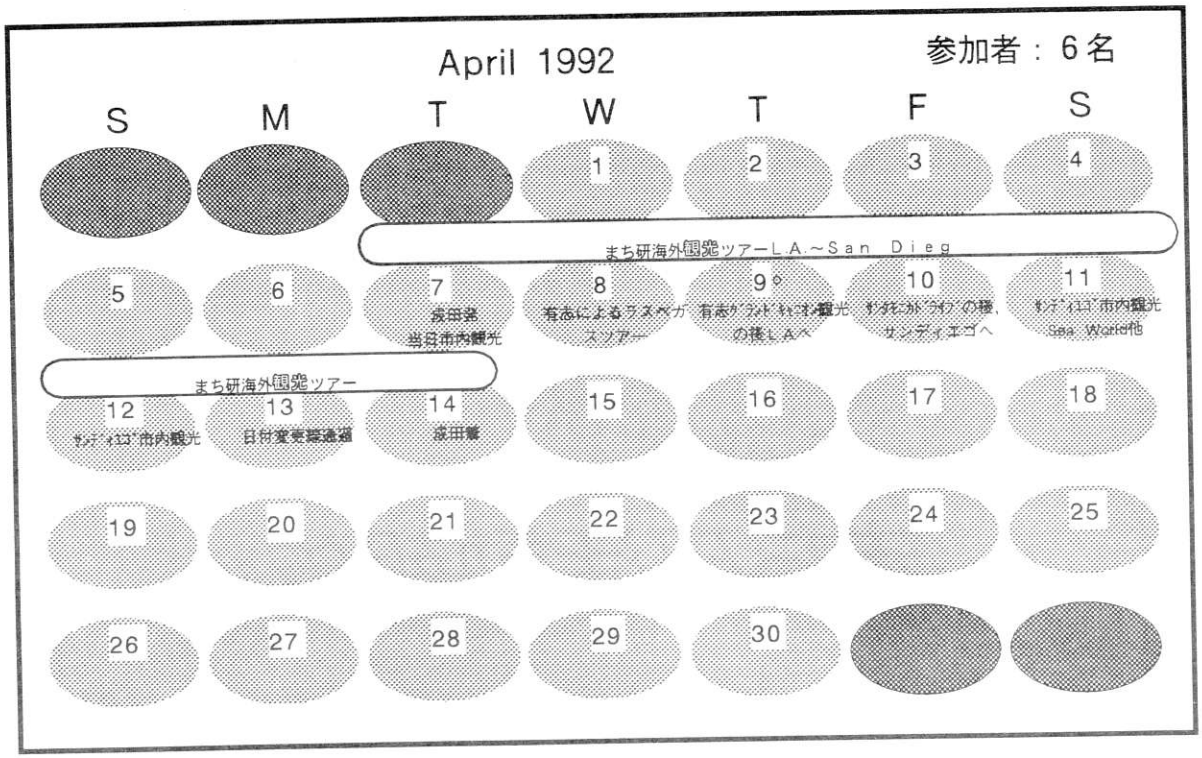
年 月 日	まちづくり研究会の活動	ヨコハマ及び世界の出来事
6，25	・内外のネットワークの巡らせ方 市大事務局　南氏	7，1　東京都粗大ゴミ全面有料化
7，16	今後のまち研を考える会	，29 パシフィコ横浜オープン
7，27	ウォーターフロント見学会 天王洲アイル地区	8　バルト3国，ウクライナ，モルドバなど10共和国独立宣言
7，30	みなとみらい２１の水際空間利用法 ーーあなたはどう考える レンゴー計画社 富岡氏，都市計画局 漆原氏	
8，31	赤煉瓦基礎連続講座（第１回） 江南女子短大 水野氏，港北区役所 古田氏	
9，14	赤煉瓦基礎連続講座（第２回） 江南女子短大 水野氏，港北区役所 古田氏	10，15 ボスニア，ヘルツェゴビナ独立宣言
10，12	赤煉瓦ネットワーク火入れ式	
10，13	まち歩きツアー	
10，22	アート＆デザインの街 マサキオフィス　竹森氏，都市計画局　仲原氏	11，5　宮沢内閣発足
12，3	第１回　定例運営委員会	12，25 ソ連消滅
12，14	横浜の巨大コンベンション施設が動き出した！ ・・・「パシフィコ横浜」その全容とは 都市計画局　鯉渕氏	
'92，2，4	東京フロンティアは今 東京都　宇田川氏	3，1　暴力団対策法施行
2，27	都市におけるリサイクル 東京電力 福田氏，榊原氏，環境保全局 三橋氏	，16 東証ダウ2万円割れ ，16 ヨコハマ都市デザインフォーラム国際会議開催
3，31	企業見学会「横浜ビジネスパーク」 「キリンビール横浜工場」	ＮＩＣＡＦ92'開催 ，30 赤レンガ倉庫，国から譲り受ける
4，7 ~12	ロサンゼルス，サンディエゴ視察	，31 日本最初の伝染病専門病院「万治病院」廃院 4，7　ボスニア内戦始まる
5，8	緑区探偵団とまちでの発見　續橋氏他	
7，7	都市計画基礎講座 ・手法としての都市計画 企画財政局　土井氏	5，7　細川，日本新党結成 6，3　ブラジルで地球環境サミット ，15 ＰＫＯ協力法成立
7，14	・まちづくりのコントロール~規制型都市計画 都市計画局　飯島氏	7，　バルセロナ五輪
7，21	・魅力ある都市へ～誘導型都市計画 都市計画局　国吉氏	8，1　新借地借家法施行
7，24	まちづくりを支える組織と人 市民局　中田氏	，27 金丸副総裁佐川疑惑で辞任
10，12	トルコ紀行，ドイツ紀行報告 都市計画局　大蔭氏，飯島氏	9，12 毛利衛スペースシャトルで宇宙へ 17 カンボジアへPKO派遣第1陣

年 月 日	まちづくり研究会の活動	ヨコハマ及び世界の出来事
10, 27	新総合計画－2010年の横浜市における市民生活像 企画財政局　鈴木氏	10, 17 米国留学服部くん射殺事件
10, 31	赤煉瓦ネットワーク総会・ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	11, 3 クリントン米大統領選勝利
11, 24	みなとみらい２１現状と展望 都市計画局　池田氏，漆原氏	12, 1 世界エイズデイ
12, 15	動物園とまちづくり 緑政局　石原氏	
'93, 2, 15	まちづくり郷愁を訪ねて ～欧州まちづくり視察報告～　法政大学　田村氏	1，1 ＥＣ統合市場スタート ，15 釧路沖地震(M7.8)
3, 18	中国「開放」最前線都市・・・上海 早大商学部　陳建安氏	，22 日本人の78%が都市居住との調査発表 4，8 国連ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ中田さん射殺
4, 1~4	上海視察	5，4 PKO派遣者高田さん死亡
5，19	横浜のシティーセールス 港湾局　前田氏	，13 米国SDI中止を発表
5，26	もうひとつワンランクアップ講座 ・財政運営と企画調整機能 保土ケ谷区役所　石阪氏	
6，2	・長期にわたる事業の展開と工夫 （港北ＮＴ）　都市計画局　市原氏	
6，9	・高齢化社会問題の戦略と企画調整 企画財政局　細谷氏	
6，16	・パブリックアートはまちを変えるか 建築局　北沢氏	7，12 北海道南西沖地震
6，23	・国際化，情報化とｿﾌﾄｲﾝﾌﾗ整備 市大事務局　南氏，米加大学連合　Jones氏	14 横浜ランドマークタワー落成 8，9 細川内閣発足
7，20	横浜駅周辺商業地区の現状と展望 横浜高島屋　山口氏	，17 １ドル１００円時代へ 9，20 本間宮城県知事ｾﾞﾈｺﾝ汚職逮捕
9，29	男女共同参加社会について ﾌｫｰﾗﾑよこはま　桜井氏	10, 3 モスクワ市街戦状況
10, 27	Ｍａｃでまちづくり（ｺﾝﾋﾟｭｰﾀと行政） 逗子市役所　佐藤氏	11, 12 環境基本法成立
11, 13	赤煉瓦ネットワーク総会（in舞鶴市）	
11, 30	本市における区役所機能強化 の基本的方向　市民局　鈴木氏	12, 24 ゆめはま2010プラン長期ﾋﾞｼﾞｮﾝ発表
'94, 1, 14	ヨコハマで学ぶ日本研究者 米加大学連合日本研究ｾﾝﾀｰ P. ｺｰﾂ, E. ﾗｽ	1，1 ＥＥＡ(欧州経済地域)発足 ，17 ロス大地震
2，15	江戸東京博物館見学　大瀧氏	，29 小選挙区比例代表並立制可決
3，10	ペナン市における都市づくり 都市計画局　国吉氏	2，1 市の「業務核都市構想」8省庁から承認

年 月 日	まちづくり研究会の活動	ヨコハマ及び世界の出来事
3，25 ~29	マレーシア視察	
4，26	マレーシア視察報告会	4，28 羽田少数連立内閣発足
5，10	もうひとつワンランクアップ講座 ・都市デザインの世界 都市計画局　国吉氏 ・横浜市における企画調整機能について 建築局　石阪氏 ・都市政策における 企画調整機能について 企画財政局　鈴木氏 ・横浜の経済～企業誘致などを中心に 経済局　川口氏 ・まちづくりの発想から 都市ヨコハマをつくる 法政大学　田村氏	
6，11	よこはまポートサイド地区見学会	6，27 松本サリン事件
6，23	新中央図書館のすべて 教育委員会　坪内氏	6，30 村山自社さ連立内閣発足
7，15	三菱みなとみらい技術館見学会 山田氏	7，8 金日成死去 8，7 第10回国際エイズ会議（横浜）
9，21	地理情報システムと用途地域の変更 都市計画局　岸田氏，石黒氏	8，　記録的猛暑，水不足 9，4 関西新空港オープン
10，26	国境を越えたハイテクパークの企画と運営 ドイツ企業の進出と横浜のポテンシャル ドイツリアルエステート　猪股氏	10，　大江健三郎ノーベル文学賞
11，17	ジョイポリス体験ツアー	
11，22	アートマネージメントは文化行政のキーポイント 市大事務局　南氏	
11，25 ~26	福島県の中世イギリス村 “British Hills”宿泊ツアー 赤煉瓦ネットワーク江別総会	
12，6	中華街の「過去，現在そして未来」を 聞いて食べる会 横浜華僑会　呂氏，林氏，曽氏	12，19 ゆめはま2010プラン事業計画発表
’95，1，18	横浜市における都市研究 企画局　中川氏	1，17 阪神淡路大震災
1，30	アートマネージメントは文化行政のキーポイント 関東学院　小林氏	3，20 地下鉄サリン事件
4，15	まち研設立１５周年記念フォーラム	

まち研活動報告

まち研海外ツアーL.A.～San Diego



企画者であるM氏の海外出張に合わせて行われた今回のまち研ツアーは初めてアジアから飛び出しただけでなく，ひときわ観光色の強いツアーであったことも特出すべき点であろう。

M氏は市職員として初めての海外留学研修をロサンジェルスで経験しているため，氏のガイドぶりはさながら水を得た魚のようである。

関東平野に匹敵するほど広大で，しかも電車，バスといった公共交通機関に乏しいロスの街を把握するのに氏の土地勘とレンタカー無しでは到底不可能であっただろう。

前半のロサンジェルスで特に印象に残っているのは街はずれの丘から眺めた広大なロスの夜景である。果てしなく広がるその様はアメリカという国の偉大さを雄弁に物語っていた。

ツアー中盤での有志４名によるラスベガス珍道中は，おさかなM氏の引率なく敢行された。ラスベガスについていまさら多くを語る必要はないが，何もない砂漠の真ん中にどうしてこれだけのヒトとカネとエネルギーを呼び込むことができるだろうか？

無事に珍道中を終え，再びM氏と合流した一行は最終目的地のサンディエゴへと向かった。横浜市との姉妹都市でもあるこの街はアメリカ西海岸の最南端に位置しメキシコ国境にも程近く（なんと路面電車で30分の距離！）４月上旬でもＴシャツ１枚ですごせるのだ。椰子の街路樹とアメリカズカップの期間中でもあり旗が街中にたなびくこの街はまさにアーバンリゾートさながらという感じであるが，アメリカ有数の軍港のある街であることも忘れてはならない。

まさに観光漬けのツアーではあったが，アメリカというピザパイのその大きさに驚かされっぱなしの１週間であった。

上海・蘇州　見学ツアー
１９９３年４月１日から４月４日

４月１日　成田空港→上海空港
　　上海市内見学
４月２日　蘇州見学
４月３日　上海市内見学
４月４日　上海市内見学
　　上海空港→成田空港

上海は1993年当時も次々と高層ビルの建設が続いており，現在では南京路周辺の景観は一変してしまっていると思われる。上海市東部の浦東開発区も，農民の住宅を撤去しているところで空き地が目立っていた。

上海・蘇州見学は，横浜市に研修に来たこともある黄氏にお世話になった。建設が進む上海市内のオフィスビル・黄甫江の対岸の大規模開発区域；浦東新区や黄甫江をまたぐ橋・トンネルのほか，上海・蘇州の旧跡をめぐった。

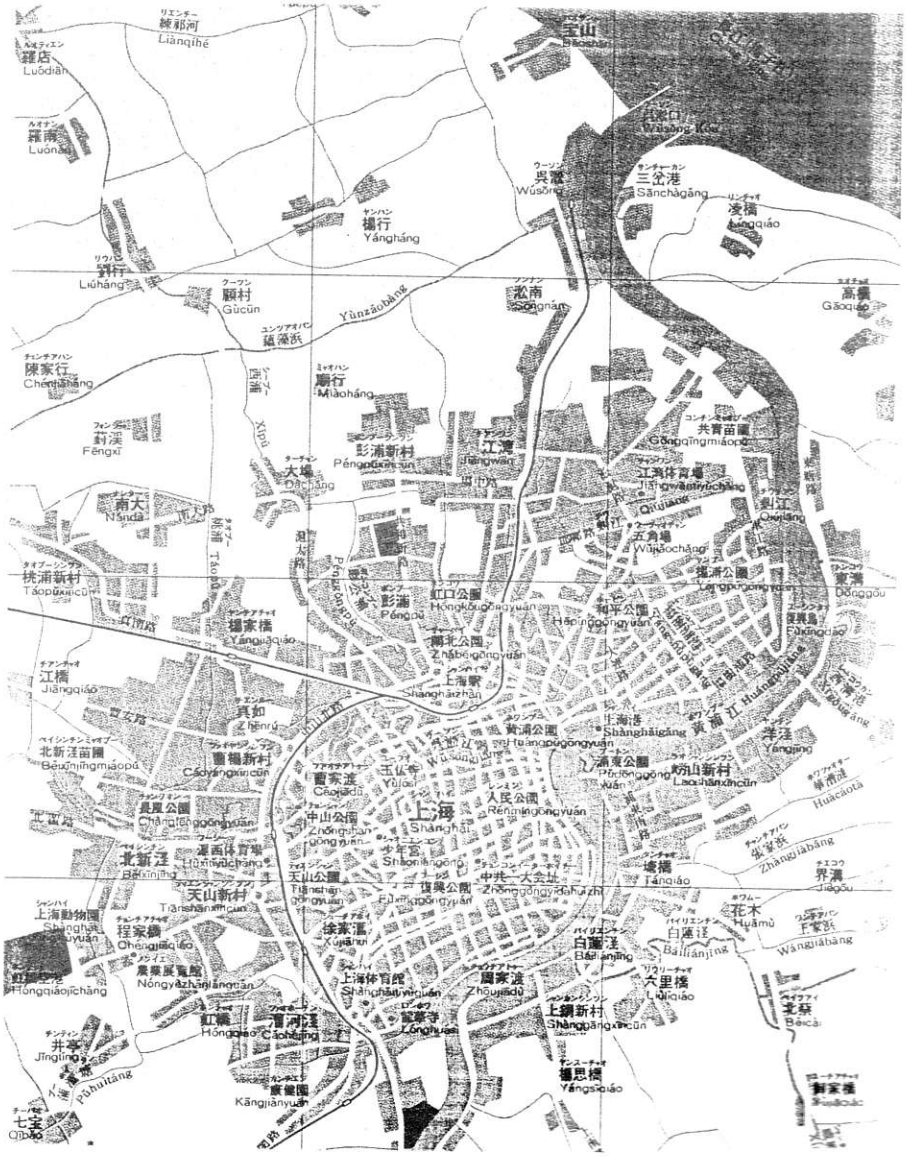
第１日目に空港を降りて入った上海市内は，外国というより懐かしささえ感じさせる雰囲気が漂っていた。租界時代から建っている中国式長屋“リーロン”の並ぶ狭い路地は通行人と自転車，乗用車・トラックが入り乱れていて，よく「オリンピック直前の東京のような」といわれる猥雑さと活気に満ちていた。劇場・土産物センターなど年季の入った建物ばかりで，夜，学校の椅子のように硬い座席で見た曲芸にも1960年代に引き戻された気がしてしまう。

南京路に沿って歩くと，屋台の焼きそば屋からレコード店おもちゃ屋まで様々な店が並んでいる。外灘に近づくにつれ高層建築が増え，日本のデパートも進出しており，今後，浦東新区の開発が進むにつれ高層建築の建設がすすみ，見渡す限りのリーロンの家並の景観を変えてゆくものと思われる。1993年当時は，混雑した大通りも夜８時頃になると，ネオン灯の橙色の光の中に人影もまばらで，外国人向けの店以外はシャッターも閉まり，何家族もが集まって住むリーロンの奥には明かりすら見えなかった。しかし，上海が夜眠らない都市になるのは時間の問題かもしれない。

移動については，自動車の私有が厳しく制限されていて鉄道も少ないため，乗り物はタクシーとトロリーバスに頼る。周辺部も含めて100万の人口の割に交通麻痺でないのは，こうした厳しい規制のためと思われる。その代わり，トロリーバスは本数が多いにもかかわらず，車内は大変混雑していた。

最終日に見学した浦東新区は一部造成を開始していて，環状道路が一部開通したところであった。横浜市の市域面積に匹敵する広さの大事業だが，当時は一面の空き地である。農民を強制的に立ち退かせるという少々荒っぽい方法で開発が進められいる。

これに対して蘇州は，上海に比べ市中心部の再開発は進んでおらず，今のところ開発は専ら郊外で行われており，集合住宅・大学・広幅員道路の建設が進んでいた。この点では，観光都市として古都の資産を保存する意図がうかがえた。■



ペナン・クアラルンプールツアー
１９９４，３，２５〜３，２９

3月２５日　成田空港発→ペナン，ジョージタウン着
3月２６日　ジョージタウン市役所訪問・ジョージタウン市内見学
ペナンヒル見学
3月２７日　ペナン空港→クアラルンプール
3月２５日　クアラルンプール市内見学
3月２５日　クアラルンプール発→成田空港

1994年の海外見学先には，マレーシアの首都クアラルンプールと，第二の都市ペナンが選ばれた。主な目的地，ペナンのジョージタウン市では1987年に都市計画局都市デザイン室の協力でアーバンデザインプランをまとめて以来，横浜市の国際協力事業により人材派遣を中心に交流が続けられている。

マレーシアまでは空路片道７時間の距離があり，滞在時間は限られていたが，当地で活動をされている様々な人々を訪ねることができた。ペナンでは，ヘリテイジ＝トラストの事務局長タン氏・クー女史，ペナン植物園友の会のアーマッド氏，クアラルンプールでは，JICAで住宅都市整備公団から派遣されている勝美氏にそれぞれお世話になり，日程を大変有意義に消化できた。タン氏にはジョージタウン市内見学のほか，ヘリテイジ＝トラストが保存している旧孫文邸や，現在はアーマッド氏のお住まいになっている英国統治時代に作られたペナンヒルの邸宅にも上がらせていただいた。

中国系住民が多数であるジョージタウンは，外資系の工場が並ぶ対岸のマレー半島本土側と対照的な，植民地時代からの建物が多い町である。市役所は，この景観を罰則付きのガイドラインで保存しようと試みている。市会議員を公選できないなど，日本以上に制約が多い中でのこの試みに，移民であるここの住民の，アイデンティティのかたちを守る意気があらわれているように思えた。しかし一方で，ジョージタウン市内も，郊外から高層建築が建ち始めていて，旧市街にも罰金を支払ってでも違反建築をするものがあるという。また自動車を排しているペナンヒルにもリゾート開発の計画があり，市民が美しい町並みをどう守るのか，困難な局面に立たされつつあるように感じられた。

首都クアラルンプールは，高層建築の建設が続いており近代的な都市である。道路などの基盤は整っているが道路は渋滞が多く，歩道に穴があいていたり，水道栓が飛び出していたりして危ない。このあたりが技術の追いつかない部分で，こうしたマレーシアの進歩性と開発途上の部分の同居が所々にみられた。

マレーシアはかつて英国領であり，ジョージタウンにもクアラルンプールにも，道路や公園・建築物に英国統治の影響が感じられる。この２都市を建設した英国人は，ここを「自らの土地」と考え本国の流儀で都市基盤を整備した。そして，現代のマレーシアはこの都市の骨格を劣化させることなく引き継いでいる。ジョージタウンの道路は規則正しく張り巡らされ，そこに植えられた街路樹は直径が２メートルもあろうかと思うほど太く，枝葉をいっぱいに広げている。この巨大な街路樹は植えられてから１度も動かす必要はなかった。その時には，町の道路と緑地の配置計画は完成されていたのである。将来もこの遺産が守られることを願い，成田への帰路へついた。■

GEORGE TOWN, PENANG

imidas

imidasは1986年11月に最初に発行された最新用語辞典である。発行当初より「都市」の部を田村さんが引き受け，まち研のメンバーが執筆協力している。当初田村さんは断ろうと思ったが，「待てよ」とまち研の存在を思い出し引き受けることにしたそうである。集英社の最初の担当の松島さんによれば，以前田村さんの本を読んで編集者ごころに感じるものがあったらしく，是非書いてもらいたいと思ったそうである。

最初は，用語選び，分担して原稿執筆，持ち寄って検討会等かなりの密度で取り組み大変勉強になった。

それでも田村さんにはバッサリと修正された。中身の説明のこともあるが，いきなり長々と説明を続けていたりして，用語解説の体をなしていないというわけである。その後，だいぶ要領を得て来たが，それでも毎年，新規用語を入れ，残留用語も最新情報を盛り込み，また特集をくむ（1995年版はまちづくり戦後50年のあゆみ）など，作業を行う梅雨どきから夏場は忙しくなる。

日ごろの都市をめぐる動向にアンテナをめぐらせ，これからも用語を通じてまちづくりと社会のかかわりに注目して行きたい。■

現代都市読本

1994年3月，東洋経済新報社から田村さんの著書「現代都市読本」が出版された。大学のテキストにもつかえるようにと配慮された都市問題の総合的な解説書である。

田村さんは，イミダスでだいぶ書くことに慣れて来た我々により高度なトレーニングをと，各論部分の素案執筆を投げかけてくれたのである。10名が1～2節ずつ，計16節を担当することになり，分担を決め，節の中の構成を持ち寄り検討したうえで，各自書き始めた。1節およそ7000字。イミダスのように短くまとめるのも大変だが，まとまった字数を書くのはずっと大変である。字数で表すよりはるかに多くの情報をもっていないと書けないことに変わりはないからである。

一つの課題にも，その歴史的変遷，法令的背景，海外の動向等，書くべきことに際限は無い。

一人が2節を担当する場合，一つは仕事の関係でよく知っている分野にしたが，結果的にはそちらのほうが田村さんの直しが多かったりした。専門に偏していたのかもしれない。

書いてみて，そしてできあがった本を見て，あらためて現代都市のかかえる課題のひろがりと奥深さを感じた次第である。■

横浜水際会議

1992年9月8日，横浜で92ウォーターフロントサミット「横浜水際会議」が横浜市開港記念会館で開催されました。生活を豊かにする水辺とまちのあり方を考える市民グループの活動の紹介と交流を図るため，年1回開かれている集いです。88年に神戸から始まりました。当日は市の内外から約220人が参加し，身近な自然環境の保存と活用方法などについて話し合いました。主催はまちづくりにかかわる市内の市民団体で構成された実行委員会で，まち研も「よこはまかわを考える会」などと共に参加し，パンフレットの作成，各団体との連絡調整等を担当しました。

午前中の「野外シアター」では「丘」「海」「川」「街」の4コースに分かれて市内を散策。午後の「開港館シアター」では全体を劇仕立てにし，次のとおり進行しました。

準備や当日の運営を通じ，全国で活躍する団体とのネットワークが広がり，普段あまり交流のない市内の他団体の人たちとも交流が深まりました。こうしたイベントはまち研の活動の中では番外編ですが，これからも活動の幅をを広げていきたいと思います。■

プロローグ	基調講演“水都の再生”ー生活と文化の視点からー	講師	法政大学教授　陣内秀信氏
幕間劇	映画「追憶の水迷宮」横浜の人・ひと	製作	横濱井戸端会議　監督　村田和義
第1幕	テーマ「残」		
第2幕	テーマ「造」		
第3幕	テーマ「生」		
エピローグ	パネルディスカッション「水際都市ヨコハマ」		

残造生

教文セミナー（９５年１月～３月期　金曜夜間コース）
「まちづくり教室」運営顛末記

ある日，教育委員会のＳ氏から私のデスクに電話がかかってきた。「まち研で教文セミナーの企画をしてもらえませんか」これを聞いた時，「これはうまくやればおいしいかも」と思い早速，まち研の運営委員会でみんなに聞いてみた。「ＰＲも，会場取りも，受講料，謝礼の管理も教育委員会がやってくれるまち研の連続講座をやってみませんか」

この声に早速３人の侍がこれに応えてくれた。そして，「よし，全体コーディネーターは村橋先生（横浜市立大学経済研究所教授）に頼もう」と会社を休んで先生の研究室に乗り込んだ。幸運なことに当時「横浜地図博物館」で忙しかった先生が，この唐突な以来を快諾（良かった！）。ここに村橋先生とまち研有志４人（その勇姿？次ページ）のにわか実行委員会が誕生した。さらに，これに便乗して一昨年のリカレント講座以来の懸案だった村橋先生とのいくつかの共同企画を実現してしまった。（詳細次ページ）

教文セミナーは原則１０講座からなるのだが，ワンランクアップ講座での反省から全部で隔週５回とし，内容は一方で火曜日に同講座を企画している『よこはまかわを考える会』の鶴見区Ｋさんと調整，それぞれ５回づつとした。そして，彼女たちは「水」にこだわったまちづくりの講座を，我々は地域での市民まちづくりの講座をやってみようということでスタートした。

さらに，まち研の月例定例会でも，コミュニティ行政研究会の企画局Ｎさん，新宿区のまちづくりということでＯさんを講師に迎える講座を企画（予定）し，１／２９の市民まちづくりを地図から考える「横浜地図博物館」のスタッフにも何人かが参加するなど，その連動も図ったのでした。

また，講師の選定は一連のコンセプトは次につながるものをということで考えた。（詳細次ページ）「横浜の市職員を中心とした自主研究団体であるまちづくり研究会が・・・という企画を教育委員会としているのですが，そこで・・・」と各講師への突撃アポイントにいぶかしげな表情の講師の皆さんにも快諾（？）をいただいてしまった。

そんなこんなで４０人弱の受講者も集まり，ようやく１／２０日に第１日目を迎えることができた。その最中も，４人のなかでの「知恵袋」の総務局Ｋさんが阪神大震災で超多忙となったり，折からのインフルエンザで体調を崩す人がでたり，講師の先生が電車事故で３０分遅れたり，講義終了後の２次会の店（「浜風」ーＳさん最後に「ちゃんこ」食べられました）捜し（今回はこれが大変だった！）などしながらも波乱万丈の５講座をなんとか終えることができました。

詳しい内容については，後日まとめたいなと思っている予定なので（「一人でやって」なんて言わないでね。皆さんお願いします。）また後で。

本当に村橋先生をはじめ講師の先生方，そして，受講して下さった市民やまち研の皆さん，教育委員会のＳさん，スタッフのＫ，Ｓ，Ｔさん本当にありがとう！

また，機会があれば声をかけます。（迷惑かな？）

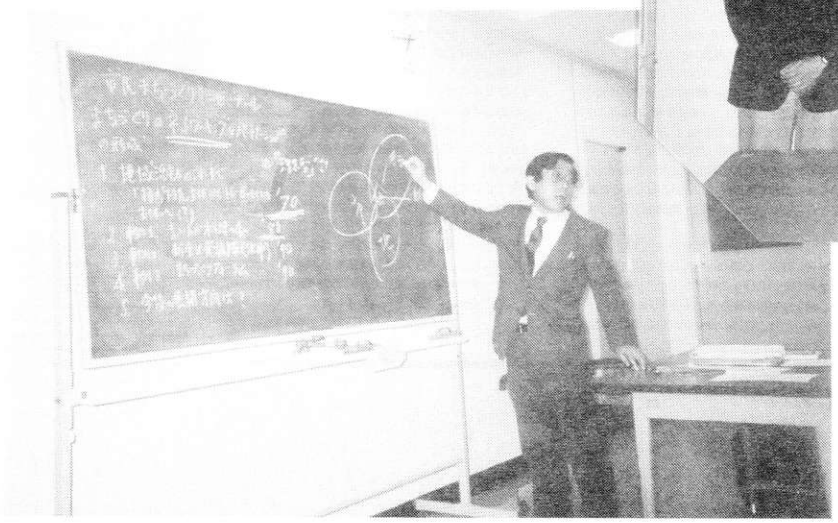
［神奈川区　高安宏昌］

今回の教文セミナーのねらい

［動機］	［セミナー］	・はすでに行動済み ［上段：次の研究課題，下段：次の行動課題
都市のアメニティとは？ →	AMR （アメニティミーティングルーム） 酒井憲一講師 →	シビックトラストの研究 ・横浜地図博物館への参加 ・AMR10周年Party へ参加
	↓	
グラウンドワークトラストとは？ →	英国グラウンドワークトラスト 山森芳郎講師 →	グラウンドワークトラストの横浜での可能性 イギリスの現場を見に行きたい
	↓	
市民主体のまちづくりの最近事例は？ →	長屋門公園 奥村　玄講師 清水靖枝講師 →	まちづくりコーディネーターの重要性 長屋門公園の囲炉裏端へ行こう
	↓	
現在の世田谷まちづくりセンターの話をじっくり聞きたい →	世田谷まちづくりセンター 卯月盛夫講師 →	横浜でのまちづくりセンター の可能性 世田谷まちづくりセンターの見学
	↓	
市民まちづくりの現在までのフローをまとめたい！ →	市民まちづくりの可能性 村橋克彦講師 →	市民まちづくりを社会学的に考える ・まちづくり市民フォーラムへの参加

教文セミナー　夜間部（6時から8時）　金曜（全5回）コース

No.	講座名	内容（講師からのメッセージ）	開講日等（祝祭日は休講）
K-1	まちづくり教室 清泉女子大学講師 酒井　憲一 共立女子短期大学教授 山森　芳郎 ㈱農村・都市計画研究所 奥村　玄 長屋門公園歴史体験ゾーン運営委員会事務局長 清水　靖江 世田谷まちづくりセンター所長 卯月　盛夫 横浜市立大学 経済研究所教授 村橋　克彦 全5回 50人	現在，全国各地でまちづくりの主役として，市民が活躍しています。もちろん，この横浜でも「市民まちづくり」が各地域で展開されています。本講座では今後の「市民まちづくり」の可能性について，様々な角度からの各講師のお話を聞きながらみなさんと考えていきます。この講座終了時にはみなさんもまちづくりのエキスパートに変身しているでしょう。 ①（1/20）都市とアメニティ ②（2/3）市民と環境づくりのパートナーシップ（英国グランドワークを中心に） ③（2/17）映画「ムカシがきた」とまちづくり（映画を見ながら） ④（3/3）世田谷まちづくりセンターの挑戦 ⑤（3/17）市民まちづくりミニゼミナール	1/20,2/3,2/17,3/3,3/17 ※開講日注意 受講料：2,000円



↑　企画運営スタッフ
（左から高島，加藤，
村橋教授，高安，杉野）

←　セミナー講義風景（村橋教授）

赤煉瓦ネットワーク創造（騒動）記

内藤恒平

《連絡先》
赤煉瓦ネットワーク事務局
（事務局長　清水　治）
〒221　横浜市神奈川区栄町5－1
ヨコハマポートサイド　レイナ204
045－461－4961

横浜まち研の10年近い活動が「地方自治職員研修の『OUT PUT』」に掲載された。これを見て1989年3月「舞鶴まち研」のメンバーが2回に分けて「横浜まち研」を訪ねてきた。「舞鶴まち研」を案内するまち歩きの場所に「赤煉瓦倉庫」を選んだことが「赤煉瓦ネットワーク」誕生につながる。

倉庫の前に立ち，「この2棟の赤煉瓦倉庫は，明治40年から大正2年かけて建てられました。」とどうだすごいだろうとばかりに胸をはった。ところが舞鶴まち研の馬場英男さんは，「舞鶴には赤煉瓦倉庫がたくさんあります。」と，こともなげに言うのだ。1回目訪問の馬場さんたちは,早速帰るなり，とりあえず12棟の赤煉瓦倉庫群の写真マップやビデオを制作し，2回目訪問のグループに届けさせるという熱の入れようであった。

1990年3月，横浜まちづくり研究会10周年を記念する会合が行われた。そこに「舞鶴まち研」の有志からなる設立直前の「まいづる建築探偵団」（馬場英男団長）も参加してくれた。そして，赤煉瓦ネットワーク誕生のきっかけとなる赤煉瓦を焼いていたという煙突がたくさんある窯の写真が届けられた。その後の調査で「ホフマン式輪窯」としては全国で5例目の発見となった。これが契機になって1990年11月25日，「第1回赤煉瓦シンポジウムＩＮ舞鶴」の開催。1991年10月12日「赤煉瓦を核に地域の歴史と文化を生かし個性あるまちづくりをすすめる」赤煉瓦ネットワークが7団体約1000人で誕生した。赤煉瓦ネットワークは1994年4月25日現在，全国33団体約1500人となり，事務局，会員は日夜，季節を問わず赤煉瓦を求めて東奔西走の日々である。■

赤煉瓦ネットワーク
輪環

赤煉瓦＝地域の歴史と文化を生かしたまちづくりへ

第14号
014
1995年1月25日発行
編集発行／赤煉瓦ネットワーク
編集人：立花恒平
〒221　横浜市神奈川区栄町5-1
ヨコハマポートサイドレイナ204
☎045-461-4961
郵便振替口座番号
002 00-0-11118

●輪環（りんかん）とはドイツのホフマンが考案した輪状の火を絶やさず連続稼動が可能な窯です。「赤煉瓦ネットワーク」も人々の輪により，赤煉瓦の保存・活用を中心に地域の歴史と文化を生かした「まちづくり」の火を絶やさず燃やし続けます。

設立にあたって

煉瓦の歴史は，西洋では数千年の歴史があるのですが，日本では，ほとんど明治の一代で建設されました。

赤煉瓦建造物は，日本の256ものまちにあると言われています。ひとつひとつ丹念に積み上げられた赤煉瓦は，現代社会がどこかに忘れてきた人間的な暖かみを感じさせるではありませんか。

こんな赤煉瓦とまちは，これからどのようになって行くのでしょうか。開発に追われ，姿を消した赤煉瓦建造物も多くあります。また，再利用されたり，当初の役割を終え，次の利用を待つものもあります。さらに新たにつくられている赤煉瓦建造物もあります。

わたくしたちは，赤煉瓦をその地域の歴史と文化を生かした個性的なまちづくりに生かして行くべきだと考えています。

そこで，1991年10月12日わたくしたちは，赤煉瓦にゆかりをもつ「まち」をつなぎ，赤煉瓦に愛着をもち，地域にねざした個性的な「まち」づくりをともに行動し，考え，交流する運動体「赤煉瓦ネットワーク」をつくりました。

皆さんの参加を待っています。

第4回江別大会総会報告　1994年11月26日(土)・27日(日)

▲セラミックアートセンター全景

▲林間・熱演／水野信太郎さんの基調講演

▲「江別」から「呉」へ地台の引き継ぎ

94年の総会は，11月にセラミックアートセンターがオープンしたばかりの北海道江別市で開催されました。煉瓦の町らしく，煉瓦を使った会場のコミュニティセンターは170人の人で埋まりました。

大会実行委員長の米澤金蔵さん，江別市長の挨拶等に続き，「煉瓦の赤れんが建築・いま昔」と題して「煉瓦博士のミニ講座」でおなじみの赤煉瓦ネットワークのアドバイザー水野信太郎さんの基調講演がありました。建築素材の煉瓦の持つ温かみと不思議な魅力について語りながら，イギリスの歌「埴生の宿」の「埴」（はに）とは質の緻密な粘土で，煉瓦の材料になるものであること，「埴生の宿」とは粘土で作った家であるとの解説に加えて，なんと本邦初公開「埴生の宿」を朗々と歌っていただきました。ふだん職場のおじさんたちの歌う「さざんかの宿」などという演歌ばかりを聞かされている私にとっては，すがすがしく，なつかしい熱唱，熱演のステージでした。

次なるトークセッションでは青多方，横浜，呉，舞鶴，宇部，江別，愛知など積極的に赤煉瓦にかかわって活動している団体の代表が各地での取り組みの報告，煉瓦にかける熱き思いを語り合いました。会場からの「行政とは民の動きがバラバラな都市が多い。横浜や舞鶴では協調してうまくいっているように見えるが，どこにポイントがあるのか。」という質問に対し，「行政主導ではなく，市民がやりたいことをやり，行政がそれをサポートするのがうまくいくコツではないか。（横浜）」，「舞鶴の活動はマスコミを通じ，一般に知られるようになったが，市が完全に活動を認めているわけではない。ボランティアとして地道にやる姿が美しいのでは。（舞鶴）」という意見が出されました。

総会終了後，会場をトンデン館に移し，約70人が参加する交流会が行われ，ジンギスカンの煙の中で赤煉瓦談義が大いに盛り上がりました。

翌日の見学会では大型バス1台に満腹の赤煉瓦狂集団が江別の煉瓦建造物を走り抜けました。最後の見学場所，セラミックアートセンターの煉瓦資料展示室では，開拓使時代の煉瓦や世界の煉瓦，輪環窯の模型などが展示されています。コンコースの壁にある，陶芸家会田雄亮さんがデザインしたEXTENTION 94というレリーフ（幅25m，高さ5m，煉瓦1万個を使い，人生の光と影を表現）は圧巻。この後，参加者は次回総会開催地・呉での再会を約し，煉瓦のふるさと・江別を後にしました。

（横浜赤煉瓦きりこみ隊：加藤美奈）

輪環　第14号　1995年1月25日発行

15周年によせて

会員からのメッセージ

（掲載は５０音順）

まち研雑感　１５周年によせて

都市計画局上大岡事務所
安島　馨

１５周年，おめでとうございます。私は，まち研に顔を出してからまもなく９年になるが，まち研への一歩は，就職をどうしようかと考えていた大学時代の春休み，有隣堂で手にした「都市よこはまをつくる」であった。

家に帰り，１頁目を読み始めたとたん引き込まれ，一晩で読み通してしまった。当時，就職先として百貨店を考えていた私は，こういう熱い仕事をしている役所があるなら公務員になるのもいいかなと思って，その年の採用試験を受けることにした。

就職後，庁内報でまち研を知り，かつて本で読んだ田村先生とはどんな人だろうと思い，初めて定例会に出席した。その時のテーマは，「そごう進出と横浜駅周辺のこれから」であった。レポーターを努めたそごうの方の話，田村先生の解説や批判は，面白く，刺激的であった。そして定例会後の反省会。参加メンバーの話を聞きながら市役所の仕事というのは思ったよりずっと面白く進めていくことが出来るんだな思い，また，市の管理職は，実に優秀で，個性的なんだと驚いた。さらに，日頃，表側からかかわってきた仕事を別の側面からとらえることが出来，自分の世界が少し広がった気がした。

それからは比較的，定例会に顔を出すようになったら，３年目に事務局を引き受けることになった。いつも出席者は20名程度でありながら名簿を見ると200名もの会員がいることがわかり，会報だけを受け取る会員が多い中で，出席者を保つにはどういうテーマづくりをしていったらいいか，まち研の諸先輩にアドバイスをいただきながら自分なりに考えた。「旧根岸競馬場スタンドの有効利用」というテーマでは，レポーターの報告の後，実際に現地を見学し，好評だった。会議室での議論だけでなく，実際に現地へ行って見たり，触れたりする事が出来る体験型のテーマが好評であったと思う。

４年目に横浜博覧会に出向することになる。新たに整備されるＭＭ地区の都市基盤を生かして行われることを考えたら，1250万人の入場目標は十分達成出来る数字と予想していたが，開幕後は入場者が伸び悩んだ。１日歩きまわって３つのパビリオンしか見られなかったとか，中身は筑波博の焼き直しで行く価値がないとか，横浜博覧会に対する様々な批判が出されていた。そういう中で，横浜博は，従来のパビリオン展示型の博覧会とは異なる２１世紀のまちづくりをにらんだ191日間の仮設都市であるという自分達のメッセージを，少しでもまわりに伝えたいと，はじめてレポーターに挑戦した。

恒例の反省会では，自分の担当したパビリオンへ来てもらい，説明とともに博覧会の楽しさを肌で感じてもらった。自分の思いがきちんと伝わったかどうかは疑問だが，発表のために，過去のファイルにすべて目を通し，発表用の資料をつくったことは，自分の仕事を整理するきっかけとなった。日々の雑務に追われながら，全体像がわからぬまま過ぎていくことが多い中で，はじめて自分のかかわる仕事の全体が見えてきた。

ひとつの職場で数年を経験した職員がレポーターに挑戦することは，自分の仕事を整理し，掘り下げる機会となるし，また参加者からの客観的な意見も得られるので，ぜひ後輩の皆さんにはおすすめしたい。

この４月で，まち研は１５周年をむかえるとのこと。毎月の定例会，視察旅行の開催，近年は数度に渡る海外視察，各種イベントへの開催等，企画・運営にあたっている方々にはほんとうにご苦労な事であったと思う。

発足当初は，新人職員の勉強会としてはじまった「まち研」であるが，私には市職員を中心とした巷でよくいう「異業種交流会」そのものであった。まち研は単なる「お勉強会」に満足して，何も生み出していないとの声もいただいているようだが，会合に出席したメンバーがレポーターの話や出会った会員とのコミュニケーションを通じ，日常の仕事の幅を広げたり，自分の生活に何かを生み出そうとする刺激を与えるきっかけとなれば，十分ではないかと思っている。

自分自身，都市計画で上大岡再開発の職場へ移って５年となるが，先日，数年振りに会合へ出席し，かつての会員や見知らぬ若手職員と顔をあわせ，そろそろ，再開発のまとめをやってみようかなどと思い至った。

まち研は，今まで自分の世界を広げるとともに，元気になれる場であった。会員の皆にとってもそうあって欲しいし，これからもそうあってもらいたいので，自分なりに出来ることをしていきたいと思う。

■

これから

企画局高度情報化推進担当
石田　正

またまた“まちづくりの時代”が来たようだ。かつて“地方の時代”が提唱された'70年代に，ひらがなの“まちづくり”が全国を席巻した。

やたらと商店街の敷石が赤レンガになったのもこの時期である。ネコもシャクシも（というと超然と生きているネコには失礼にあたるかもしれない）というように，まちづくりシンポジウムが全国いたる所で開かれ，自治体を補助金や規制で統制することに血道をあげてきた国の省庁さえ

も“☆☆☆のまちづくり”と大合唱した。

落語の萬金丹よろしく，何かというと“まちづくり”といえば納得顔するような，万能薬のようなこの言葉は，何やら危うい宗教団体の使うドラッグにも似て，フィールドの伴わない多数の“まちづくり信者”を産み出した。というのは言い過ぎだろうか。

しかし，近時の“まちづくり”の盛り上がりはちょっと違うかもしれない。それは，全国レベルでみれば僅かかもしれないが，自治体職員やまちづくりオタクの学者あるいは生活感のない形式的市民代表等から実質的な生活者である人々がこの言葉を実践する主役の座を奪いつつあることである。

ひらがなのまちづくりの発想は，官の制度的，権力的な決定や制度をベースにした参加システムではなく，そこに住む人々自らが選択し実践していくことを基点とするものだった筈である。それがようやく芽生えてきた。

今のところ，行政からみてよきパートナーといえるような“良い子”が多いが，これからは価値観の多様化を裏書するように，役所などあてにならないと斜めを向いていた“悪い子”や行政の“大きなお世話”など望まないサイレントマジョリティに近い，若干依存型の“普通の子”も舞台に上がってくるかも知れない。

そうした時にはじめて，カタリスト（触媒）としての自治体職員の在り方が問われるのだろう。触媒は決して無色ではないし，ＡとＢのかけあわせが単純にＡＢになったり，１と２の総和が３にしかならないようなものではない。きちんとした独自の分野と自己意識を持ち，新たな果実を生み出す機能を備えていくものである。そうした実践力，パワーをつける意識と努力を続けたい。 ■

まちづくり研究会１５周年に寄せて
―――まち研の情報発信機能を高めたい

企画局企画調整部
漆原　順一

まち研が設立１５周年を迎える。私自身も入庁とほぼ同時に事務局を預かり，早くも８年が経過した。まち研の半分以上を見てきたことになる。

その間，定例会や視察会の企画・運営や用語辞典「ｉｍｉｄａｓ」の執筆協力，さらに他都市の“まち研”との交流などを進めてきた。この５年間では，上海やロス・サンディエゴなどの視察もおこなった。また，新入職員も参加しやすいようにということで行っている「もうひとつワンランクアップ講座」もこの５年間に始めたものである。

このように，まち研の活動は，会員がまち研の名前で何をすることも自由である。その反面，求心力が弱く不安定な時期があった。この問題を何とかしたいということで４年前から定例の運営委員会を設置している。運営委員会も自由参加であり，毎月第一火曜日に会報の発送とまち研の活動に関する企画をおこなっている。このような，運営委員の努力により，まち研の母体である定例会は安定してきている。

それでは，これからのまち研はどうあるべきだろうか。私は，まち研がさらに求心力をつけるためにも魅力的な“かがやき”を持つ必要があると考えている。

おりしも，地方分権が再び脚光をあび，自治体職員の資質や政策立案能力の向上が求められている（私自身は，現在の自治体職員のこうした能力が劣っているとは思わないが）。これまでのまち研の活動は，こうしたことにも少なからず寄与していると思う。しかし，今後は，より現実的で実効性のある「近未来都市問題」など，テーマごとに部会を設けるなどしてより深く研究し，それを発表，実践していきたいと考えている。そういう機会自体は，調査季報の活用や政策プランナー研修，職員提案制度など本市においてもいくらでもある。そして，本市に限らず外へ向けても情報発信機能や提言機能を充実し，まち研の“かがやき”を増して行きたいと考えている。 ■

『まち研』の次ぎの５年を想って・・・

都市計画局企画調査課
大蔭　直子

今年は，戦後５０年，映画１００年，宮澤賢治生誕１００年などなどのけっこう区切りの年である。その中で，『まち研』は１５周年を迎えたわけだが，１０周年から５年間の歩みは遅々としてはいないか。いまだ『まち研』という言葉に，何らかのものを感じいろいろと考えを巡らす人々が存在する一方で，昨今の新入の人々へのアピール度は，どの程度のものなのだろうか。いろいろやっているのは事実。それなりの成果を挙げているのも本当。にもかかわらず，なぜか模糊曖昧と見えてしまうのは，わたしの独りよがりにすぎないのか・・・

ネットワークの継続に欠かせないのは，引っ張っている人達の魅力と仲間たちとの居心地の良さと集団にたいする義理の３点と考える。この３極の絶妙なバランスがいろいろなネットワークを創り，消滅しまた生まれてくる所以ではあるが，我が『まち研』は一体どんなバランスを保っているのだろうか。１５年を良く考えると，３極のバランスは，様々に変わりその都度毎の世相を反映しているかに思えて興味深いものがある。

田村さんの魅力に始まった『まち研』が，設立当時のメンバーがいまだ健在な居心地の良さを維持しつつ，自分の事で忙しい世代のある程度の理解を得つつ，何だかんだ言いながら１５周年を迎えられたのは，世間一般で言うところの義理だけでは無さそうだ。いやそう思いたい。曖昧な中に，感じさせるものがあるからこそと思いたい。

しかし，１５年と言えば，人間で言えば，自意識過剰の齢ではないか。『まち研』から様々な活動が生まれているのは，そんな意識の現れか。良い意味で目立って，独り立ちをするために，もっともっと『まち研』の発展的解消に向け，成人式を目指して次ぎの５年を走りだそう。

やっぱり『まち研』なんて，もういらない！ ■

まち研は私のカンフル剤

総務局災害対策室
加藤　美奈

これまで，田村先生とまち研には２度助けられている。１度目は大学４年生の時。私は人と社会を見つめ，真実を追及する新聞記者になりたいと思っていた。しかし，８５年８月の日航機墜落のニュースを見て，人の生死と報道のあり方に疑問をもった私は，その後をボーッと過ごし，入社試験にのぞみ，落ちた。フリーライターにでもなるか，大学院にいこうかと考えていた時，横浜市からの採用通知が届いた。何気なく受けていたのだったが，役人になるなんてピンとこない。そんな時，田村先生の書かれた「都市ヨコハマをつくる」を読み返す。「役所にもこんなにダイナミックで創造的な仕事があるんだ。これからはまちづくりだ。」と思い入庁する。その後これが大変な錯覚であったことに気付く。

そして２度目。まちづくりの醍醐味とは無縁の日々の暮しの中で，「自分のやっていることが市民や社会の役にたっているのだろうか。こんなはずじゃなかった。辞めたい。」という思いが募る。鬱々とした毎日の中で，まち研と出会う。以来，まち研は私にとって精神安定剤であり，カンフル剤となる。落ち込んでいても，まち研に出ると，「まだ可能性がある。明日から頑張るぞ」という気になってくる。翌日また，元のアンニュイな気分に戻るのだが…。大袈裟なようだが私が今日，役所にとどまっているのは単調な日常に刺激を与えてくれる田村先生とまち研のおかげだ。

組織（まち研が組織かどうかは別として）は成立の瞬間から解体へ向かう。けれど，まち研は山谷はあるにせよ１５年も続いている。熱意だけでは続かない。無理をせず，楽しみながらやることが秘訣だろうが，最近，会の維持のため，定例会など「何かをやらなくてはいけない」という脅迫観念に駆られることがある。これでは本末転倒だ。講師の話を聞くだけの受け身を脱し，政策提言を行ったり，実際にフィールドに出て活動することも必要だと思う。問題は誰が最初に手を上げるか。ここで一同顔を見合わせる。それには相当なエネルギーと時間が必要だからだ。

結局，落研（仕事の不満や愚痴を言い合う落ちこぼれの仲良しクラブ）の名を返上するのはまだ先になりそうだ。 ■

「まちづくり」は実践から

都市計画局金沢八景駅東口開発事務所
所長　北村　圭一

「まち研」発足の土台となった田村さん（当時技監）指導の研修に参加したのは，配置された港湾局での仕事が「八景島」周辺の基本計画という局際事業であり，職種を越えた柔軟な発想を要請されるものであったことがきっかけだったと記憶しています。当時，局には私と同職種の先輩は皆無であり，別に寂しさは無かったのですが，円テーブル主義の田村さん流の発想の魅力と既成概念にとらわれない研修の斬新さに強い興味をもったものでした。

この研修の参加者を中心に「まち研」が発足した訳ですが，ここでは様々なテーマについて話し合い，時間が来ると今度は席をかえて飲みながら時間の経つのを忘れて懇談したものでした。「イミダス」の創刊号を伊豆で起稿したことも良い思い出で，これらを通じてインフォーマルな横糸が張れたと実感しています。

「海の公園」の人工なぎさ，金沢シーサイドタウンやＭＭ２１の基盤整備計画，公園事務所での市民対応，新規公園計画での新しい試み，バブル絶頂期での用地買収そして現在の駅前再開発と今日まで様々な実践的事業を経験させてもらいました。この間「まち研」を通じて知り合った仲間の存在はいつも心の支えであり，またまちづくりは広義での市民との協調によって，広い視点に立って作り出す作品であるとの「まち研」で得

た基本的な発想（？！）に立ち戻ることによって，ひとつひとつこなしていくことができたように思われます。

現在担当している駅前再開発においても地元の権利者の方たちとの話し合いのテーブル「まちづくり懇話会」を設立することができたことがきっかけとなり，事業に対する明るい兆しがでてきました。ここでも既成の「都市計画」の概念から「まちづくり」へと発想の転換が地元に良い効果をもたらしたものと確信しています。ひらがなで綴る「まちづくり」には暖かみと柔軟性が含まれているものだとも実践を通じて実感しています。

まち研に参加していることでまちは動いてくれません。自分ながらに実践して初めてまちづくりの難しさ，楽しさを体験することができるのです。そして少しづつまちが変化していきます。

THINK GLOBAL, DO LOCAL!
TRY NOW!

素材はあなたの目の前にあります。皆さんのさらなる活躍を期待しています。■

まち研と街づくりと私

都市計画局みなとみらい２１担当
鈴木　猛史

まちづくり研究会１５周年おめでとうございます。

まち研には，入庁した１９８１年以来参加させていただいていますが，最近は，すっかり‘まち研機関紙オタク’（幽霊会員）になっております。

入庁してちょうど１年目でした。無謀にも，定例会で当時の仕事の内容を発表し，田村先生から「鈴木君の話は面白かったけれど，肘をついて話すのは皆に失礼だから止めた方がよい」とのコメントをいただき，すっかり恐縮し，冷や汗をかいたことを今でも，昨日のことのように思い出します。

また，ある年は，まち研の香港研修旅行に参加し，「君は，会になかなか参加しないからこういう機会にじっくり話そう」と，先生に声をかけられ，石田課長（現企画局高度情報担当課長）と３人で，ウイスキーを何本も空けながら，朝方まで，議論させていただいたのも懐かしい思い出です。

この間，仕事では，都心・副都心・地域拠点の整備事業，緑区の区づくり，総合計画づくり，みなとみらい２１事業などに携わってきました。

今，改めて感じるのは物事を動かし，そして街づくりをすすめていく原動力は，アンテナを張りめぐらして情勢をとらえ，未来を見据える“構想力”と，未来の街をつくっていく“情熱”（あるいは元気）に尽きるということです。

まち研は，これらを醸成する，またとない場であると思います。

１５年という長期にわたり，このような会が続いたのは，ひとえに，田村先生と事務局の方々の“構想力”と“情熱”の賜物と，一会員として感謝の気持ちでいっぱいです。

今後とも，街づくりに関心をもつ方々の交流や自己研鑽の場として，まち研がますます発展しますよう祈念すると同時に，私自身も積極的にできる協力をしていきたいと考えております。■

まちづくり雑感

旭区戸籍課
高島　滋

横浜づくり研究会１５周年おめでとうございます。研究会に参加させていただいてまだ短い時間ですが，定例会などでいつも貴重な話を聞かせていただき大変勉強になります。まちという言葉はとても魅力的なひびきをもつ言葉だとおもいます。まちは地球上ならばどこにでもあり，またそこには人々の生活が深く根づいているのがいいところです。まちというものは，建物だけでもダメ，人がいるだけでもダメで両方がそろって始めて成り立つもので，そこから醸し出される感じはあるまちではキリリと引き締まったものであり，べつのまちではだらしなくもあやしい世界かもしれません。もちろん一つのまちがいろいろな顔をもっていてそれは時や季節によっても大きく異なるでしょう。もちろんこの横浜も我々が朝起きて夜寝るまでの一日を考えただけでもじつにいろいろな顔をみせてくれます。まちづくり研究会に参加させていただいて，いままでわからなかった横浜の様々な顔を知りえたのは私にとってのもっとも勉強になったことです。

個人的には横浜のなかでは野毛あたりのあやしい感じがいいとおもいます。あのあやしさは短いあいだでは醸し出されるものではなく時の積み重ねによってつくられた人々の生活を感じさせるもので，東京の下町や大阪の通天閣に匹敵する貴重なものだとおもいます。理想的なまちを作るのは考え方によっては，どこでもできるけれどあのような長い時のながれによって生まれたまちは，いざ作ろうとしてもなかなかできないものでしょう。アジアのまちにあるエネルギッシュさを感じさせる日本の数少ないまちではないでしょうか。横浜の他にも世界各地にもちろん魅力的なまちはたくさんあります。今後もまちづくり研究会をつうじて様々なまちの色々な顔について少しでもふれることができたならばとかんがえています。■

まちづくり研究も「行動」だよ！

神奈川区課税課
高安　宏昌

これは自分自身にも課題であるのですが、ちょとした独り言です。

最近，思うのですが，ここは「まちづくり研究会」ですよね？

毎月の定例会はなんとなくの好奇心を充足するのにはいいのですが。それぞれのテーマにもう少し継続してこだわれないのかなと少し不満に思うのです。それぞれが自分で研究を深めていくことは当然なのですが，現在の状況はちょっと各自が辛抱してもまち研としての研究成果の蓄積を本当の意味でできればということでしょうか。

というと，講師がいないとか，あまり恥ずかしい成果ではとか，そんな地味なことする人いないよとかいわれてしまうのですが，やってみるという「行動」が必要なのではと思います。とかくまち研で「行動」というと，大きなイベントとか，対外的にアピールするものに囚われがちなのですが，そういう「打ち上げ花火」も大変重要だけれども，それと並行して『内部の研究あってこその「行動」ではないかな～』という気がします。

そして，ちょっと生意気をいわせてもらうと，その蓄積ができてきた頃に，我が社が現在シンクタンクに依頼しているような調査などをまち研（会員個人の顔でではなく）が依頼されるようになればいいなと夢想してしまうのです。もちろん，まち研のみなさんは所属でもそれぞれご活躍していると思うのですが，所属の異動に関わらずそのノウハウをまち研でも，まちづくりに生かせればよりおもしろい役所生活が送れるかもしれないし，個人の蓄積にもなるのではと思うのです。そして，市民の皆さんに喜んでもらえるまちづくりに少しでも貢献できればいいと思いませんか！

どうでしょう，皆さん，こんな「実践」は！

この続きは毎月第１火曜日のまち研運営委員会でお話ししましょう。

つづく　■

日本社会の構造変革の荒波の中で

田口　俊夫

今「地下鉄サリン事件」のニュースを聞きながらワープロを打っている。ついに日本もこのような危機的な社会的状況になったかと思うと，暗澹たる気持ちになる。そして阪神大震災で崩れた日本の安全神話，勤勉な国民性と高水準の技術を背景とした経済成長力，これも崩れた。ハード先行のまちづくりを得意とする日本は社会経済的背景を軽視しやすい。このような日本で，これからの構造変化に立ち向かえるのかが不安である。

はや横浜市役所をやめて丸３年が経った。今も毎月のまち研の例会に出席させてもらっているので，市役所から遠くなった気がしないが，仕事的には全く縁遠くなった。市民として見ていると，横浜のまちづくりはやはり市役所の人達に頑張って欲しいと思う。イギリス留学で学んだ都市デザインをやりたくて，横浜に住み市役所に入った人間としては，立場は変わっても市役所の応援団に入っているつもりでいる。

今の仕事は，「繊維アパレル業界」を中心に，その業界構造と発展企業の秘密，そして今後発展する企業を見つけ出すことをやっている。なかなか難しい。ワクワクしながらやっているが，そろそろ成果を出さないと，社内での居場所がなくなりそうである。

（清水建設株式会社企画営業本部開発営業部課長，1978年横浜市企画調整局都市デザイン担当で入庁，1991年退職，横浜市南区在住）　■

交流の場所の「まち研」

緑政局計画課
坪井　聡

1992年のワンランクアップ講座に出たことがきっかけになり，以来だいたい連続して定例会に参加してきた。最初は，興味のあるテーマの時に顔を出していただけだったのが，いつのまにか会誌の編集もするようになっている。

頻繁に参加するようになった理由の一つは，市役所の中で交流の範囲を広げたかったからだった。技術職，とくに造園職は職域がいまのところ限定されているので，情報を集める場所がほしかった。大学での専攻は生物学で都市計画には全く無縁だったが，とにかく話を聞いているくらいのことはできる。

そうして２年経って見ると，講師として来ていただいた市役所以外の方の名刺も溜まってきて，今退いてしまうのは惜しいと思うようになった。

こうして，自分では生物学屋さんのつもりでいる私が，まち研に入り込んで３年たつ。その間，これまで殆ど付き合いがなかった建築・土木・福祉の分野の人々と交流する場が与えられ，広い視野を保つことができた。大学に居たときは違った意味で社会

全体を広く見ていたが，いったん所属に入ると業務で直接かかわり合う範囲しか見えなくなってくる。それをまち研に出て，復元していた。もしこの場所がなければ市役所の仕事に対しても，先が見えたような気分になっていたかもしれない。

自分にとってはここは異業種交流の場所であるが，裏返して見ると，まちづくりの世界ではまだまだ造園や植物屋さんはマイノリティーなのだと思う。まちづくりに対して，環境科学または生態学の物差しで判断し，都市施設でいえばオープンスペースを着想の中心に据える人は珍種に属する。

まちづくりは，土地利用計画からコミュニティ・教育の問題まで広範にわたるテーマがあるが，ハード面に関しては圧倒的に建築＆土木の世界である。ハード面で，建築物や土木工作物以外のものはどうでもいい，というわけなのではない。世の中の力関係でいつのまにかそうなってしまった。経済成長とともに大きく育ってきた建築＆土木の世界に比べて，他の分野の陣立ては弱小になってしまった。都市の中で環境の質を高めようとする側は，立場が弱く，技術・情報そしてノウハウの蓄積があまりに少ない。

まち研を今まで情報交換・交流の場所にしてきた。ここで広げる交流の輪を，情報と技術の不足している，その他大勢のマイノリティー（自分も含めて）へ振り向けることを目標にしたいと思っている。■

階段を登るのではなく，飛べるのが『まち研』です

企画局都市づくり推進課
内藤　恒平

まち研１０周年の記念の会で前に出て「あいさつ」をしていた僕の前にちょこちょこと飛びだしてきて，ちょっと困った顔をして「パパおしっこ！」と叫んだ息子，想（のぞむ）ももうすぐ小学校２年生になります。明けても暮れてもサッカーとクレヨンしんちゃんのものまね「○○すればー」や超！スーパー！ミラクル！を連発している。想の言葉を借りて僕のこの５年間について言えば，「仕事もそれ以外の時間も超！スーパー！ミラクル！凄かったぜ！」とでも言えるのだろうか。

仕事は「緑化推進」「市民まちづくり推進」「都市づくり推進」へと変わったのだが職場の名前に「推進」とつくのは３回連続，「づくり推進」は２回連続，オペレーターのいないブルドザーよろしく「道標（しるべ）なき道（未知）」を歩き続けたというと恰好が良すぎるか。また，仕事以外でも「赤煉瓦ネットワーク」の設立，イミダス・都市読本作成の手伝い，他都市へでかけての講演・発表等々・・・。こうして並べてみるとこの間の活動も「まちづくり」という一本の糸に紡ぎあげられるもののような気がする。

「まちづくりの研究を続けているとこれで終わりということがない。知りたいこと，調べなければならないことが今まで以上に出てくるものなんだなあ。」とは田村さんの言。まち研創設者の一人は言う「まちづくりは森羅万象だ」。これからも形はいろいろあるのだろうが「まちづくり」にかかわっていきたい。

１３年前にまち研を通じて知り合った妻（恵子）と「いわゆる勉強ではなく，研究会（その後の飲み会も含めて）で自分の想像を絶する凄いことが聞け，自分を飛躍的に高められる」あの「まち研」に，また二人揃って参加できたらと語り合っている。■

老兵は歩き続ける

都市計画局都心部整備課
仲原　正治

１５年という歳月が長いのか短いのかはわからないが，ある青春の一瞬を駆け巡り，自分を発見し，自分のアイデンティティを見つける旅だったのだと思う。

３０になるかならないかの微妙な年齢に，公務員という職業を選び働いていても，なにか燃えるものが自分の内からは沸き上がってこない。かといって，普通の家庭生活や普通の仕事の中で埋没していく自分はガラじゃないし哀しい。そんなときに，田村さんとの出会い，まち研との出会いがあった。この出会いから僕の人生は急転回を始めることになる。

「まち」の抱える問題は，自分の生活の問題であり，人の心の内にある矛盾との葛藤でもある。自分にとって都合の良いことが他人にとっては不都合であり，他人にとって良いことが自分には極めて困ること，そんな連続がまちの中にごちゃまぜになって存在している。それを「公」という武器で一刀両断にしてしまうことに行政の難しさと公務員という職業の辛さがある。「最大多数の最大幸福」と昔の哲学者は言ったが，価値観がこれだけ多様化した時代には何が幸福なのかは見当がつかなくなってきている。

とすると，何を根拠に自分は動いていけば良いのかと悩むことになる。結局，自分自身の価値観やセンスで動くしかないという結論は見えてい

るのだが，しかし，その価値観やセンスはただ黙っていて培われるものではなく，何らかの積み重ねによって醸成されていくものだ。いろいろなモノを見て，いろいろな人に会い，さまざまな価値観を共有し，少しずつ蓄積されていくものである。そこで「まち研」というなんだかわからない浮遊体の存在がクローズアップされてくる。

このまち研の１５年を振り返ると，その時代の事務局の考え方と世相や行政の動向が見えてくる。初期段階では，知識と経験をなにしろ多く詰め込むことが主題で，６大事業を初めとする行政課題の内容講義や現場を回ったりで，計画主体や現場の若手が「まち研」という場で発表する機会をもつことにより，職員自身が鍛えられる。その発表者が次にはまち研の主要メンバーとなっていくという作りをしてきた。５年目くらいになると，行政課題という知識を知恵に転換させるべく，市役所内部だけでなく，外部との接触により，留学生や企業の方々の参加が少しずつ増えて，自分の中でのまちづくりのネットワークをどう構築していくかということが課題となってきた。そして次の段階では，「ヨコハマフラッシュ」のように，街に出て，街の若者や企業と一緒に動き，まちづくりのソフトを市民と共有するという動きも出てきている。そのころが僕にとっての最後のまち研を舞台にした演出だったと思う。

１０年目以降のこの５年は，いろいろな都合でなるべくタッチすることを控えてきた。このごろの動きを見ると，なぜか世相を明確に表しているように，ちょっと閉鎖的で「普通」の動きに徹しているように見える。ワンランクアップ講座は職員研修的な内容で研修所で行うことをちょっとひねって講義をしているように感じられるし，定例会も時代のムーブメントを共有するのではなく，知識を知識として吸収するということに徹しているように感じられ，若者がもっている冒険心が感じられない。たぶん，書いている僕自身が「まち研」の創成期に自らが動き何かを造ってきたという自負があるために，物足りなさを感じているのだろうと思うのだが，どうもこのごろ「行く勇気」が沸かないのである。そのため「まち研」の構成員が中心となって活動している「赤煉瓦ネットワーク」やまちづくりのイベントの実施の方に勢力を割いてしまっている。

人は少しずつ進歩していく。同じ場所に留まって，新しいことにチャレンジしていくことも重要だし，新しい場所で新しいことに挑戦していくことも必要なことと思う

『強烈に刺激を与えるような何かを創り出す』

それを「僕」が「まち研」に主体的にかかわって創り出していくことも，受動的に期待することも無理なことなのだと感じてしまっている。こういう気持ちになっているので，今の僕は「まち研」を中心に動くことを，していけないのではないかと思う。ほんの片隅で「まち研」を見ながら，もっと違った自分の舞台を造り，実践していくこと，そういう道を進み始めたのではないかと思う。むろん，「まち研」で培った思想を携えながら。

『老兵は消え去るのみ』そして『老兵は歩き続ける』 ■

でも，「まち研」は続く

総務局市長室調査等担当
南　学

まち研は今年で１５周年。大昔では「元服」の年で，一人前になったということであるが，どうであろうか。

実はこの原稿を書いているのはこの記念誌を編集している時なので一部の方の原稿をすでに読ませていただいている。１５年もたつとそれぞれの人にとっての「まち研」の位置づけの違いがはっきりしてきているように感じた。一人前と思う人，まだと言う人，後退したのではないかと言う人，評価は決まらない。でもただ一つ，文章を寄せていただいた方のなかで「もう役割はなくなったのだから止めてもよい」という人は一人もいないことは確かであった。また，会員の年令の幅もかなり広がり，上下で２０歳は離れているのではないだろうか。発足当初はほとんど同年代であったが，今は「世代間の違い」まで議論するほどに開いてきた。

「まち研」をさまざまな人と情報との出会いの場所であるとして，「とりあえず続けてみるか」程度の一致点は十分に確認できたので，「まだまだ続けていこう」と思いを新たにしたというのが正直なところだ。普段の運営では企画が決まらなかったり，人が集まらなかったり，いろいろと苦労があるが，１０周年や１５周年などの節目ではメンバーのそれぞれの「愛情」が集まってくる。なにかあったときに仕事を頼める人が数十人もいることは貴重である。

自分にとっての「まち研」は，発足当初は情報収集と人的ネットワークの基盤づくりとして位置づけ，自分のためになると考えて運営に関わったが，１０周年の頃からは，「自分のため」より，このような機会はほかの人，とくに勤め始めて経験が浅い人にも持って欲しいという要素が加わった。自分の関心をメンバーと共有する，やりたいことの実践に仲間を募る，国内や海外へのツアーを組むなどいくらでも便利に使えるのが「まち研」である。たった一つの制約は，自分で「やるべき」と考えたことを実現するのは自分しかいないということだ。アドバイスをしてくれる人や手伝ってくれる人はいても，自分の代わりに働いてくれる人を期待しては自分を広げることはできない。

「まち研」は自分を広げるための道具であってそれ以上ではないと思う。その意味でまだまだ「まち研」は続けていきたい。 ■

「田村さんの肖像」とまち研

朝日新聞横浜支局
山口　進

朝日新聞神奈川版に「百人の肖像」というシリーズがある。毎週日曜日，神奈川にゆかりの深いひとびとの人生哲学に耳を傾け，その人物像をポリフォニカルに描こうという試みである。但し，あくまで試みであり，成功しているかどうかは定かでない。

私は昨年十月，田村明さんに登場を依頼した。「都市ヨコハマをつくる」に魅せられて，というか，正確にいうとまえがきに酔わされてというべきかもしれないが，山下公園の近くに間借りした私にとっては，必然の選択だったといってよい。

ご本人に寸暇を割いていただき，長時間のインタヴューをお願いした。そのあとの，取材全体のなかでは比較的初期の段階で，まち研の方々にお茶や食事をご一緒していただきながら，いろいろとお話を聞いた。

仲原さんは，ポートサイドの一室で，「田村さんには，議論では立ち向かわないことにしている。『仲原君の叙情的な文章は直せない』といわれた」と笑みを浮かべた。

内藤さんとは，コーヒーの大学院で一時間ほど粘った。「個性と歴史を生かしたまちづくりを教わった」と話しながら，後半三十分は赤れんがネットワークにかける思いをとうとうと述べた。

「今，君は何をしているの」「それはどういうことなの」。ロイヤルホストで大蔭さんは，若い人の考えに耳を傾ける大先輩の姿を描写したあとで，「話し出すと止まらない。それなのにみんな神妙に聞いているのがおかしい。不届きかもしれないけれど」と打ち明けた。

田口さんは，田村さんご用達のレインボーで「色々な事業をどういった戦略で実現したのか，背景や人間関係にまで踏み込んで，伝記を書きたい」と結構本気だった。

当時は「まちづくりはひとづくりから」と名刺に刷り込んでいた石田さんは，利久庵で「講演をしても，未だに横浜の話が大半。もう少し普遍化していく役割があるのではないか」と期待を語った。

まち研の方々も含め，この偉大な都市プランナーと深い関わりのある二十人ほどに会い，十人に電話で話を聞いた。オフレコを条件に話してくれた市幹部や大学教授もいた。兄は，弟の精神形成期の記憶をたぐってくれた。柳川市役所の広松さんや，高速道路問題当時の建設省都市計画課長補佐にまでコメントを求めたりもした。

そのおかげで，巨人のさまざまな横顔を知ることができた。と同時に，それぞれの田村像が，それぞれの世界観，まちづくり観を垣間見せてくれた。十二月四日付の記事に，この多様さ，豊饒さを反映できたとは言い難いのが，心残りではある。■

大都市の小さな単位をどうつくる

市大事務局付属病院業務課
橋本　道子

昨年，横浜に関する新聞記事のコピーをいただいた。どこの新聞社のものかは忘れてしまったが，その主旨は「横浜というまちは大きくなりすぎてしまったのではないか」というものであった。私自身は横浜というまちがとても好きで，横浜市が大きい都市であることにも誇りを感じていたので，その記事を読んだとき，正直なところ驚いてしまった。全く自分の思いもしなかった，盲点をつかれた感じだった。

確かに横浜市をよく見ていると，行政区は１８区もあり，人口は３３０万人もいるかなり大きな都市である。みなとみらいがあれば，田園風景が広がっている所もある。自分自身が市民として振り返ってみると，自分が３３０万分の１でしかなく，自分の住んでいるところは，横浜駅付近や関内，みなとみらいとは違うような，疎外感と言っては言い過ぎだけれども，複雑な感情は確かにある。

けれども，自分の住んでいるまちに，いろいろなものが存在していることはとてもおもしろい。少し足を延ばせば遊園地もあるし，港にも行ける。整理されつつあるおもちゃ箱のようなまち，というのが私の横浜に対して抱いているイメージである。そして，何よりおおきなまちには大勢の人が住み，出会うことができる。私は，職場の関係で市民の方と直接話をする機会はあまりないが，仕事やまち研を通じてさまざまな方に会うことができた。就職し，横浜市に関わるようになって２年が経ったが，そのことが一番の収穫だと思っている。

確かに横浜は大都市としての問題をかかえているが，逆にメリットもある。しかし，その大都市としての機能を有効に働かせるためには，地域社会，コミュニティという小さな単位での枠組みもきちんと確保し，市民の声を吸い上げそれを施策に反映できるようなシステムづくりが必要なのではないだろうか。小さな単位がうまく機能して，大きな単位もよく機能するのではないだろうか。これからは，この小さな単位をどうつくりあげていくかがこれからの横浜の課題であると思う。

最後になりましたが，まちづくり研究会設立１５周年と田村先生の環境庁長官賞受賞を心よりお祝い申し上げます。■

資料

⑤まちづくりを楽しむ「まち研」

基礎知識講座も自主的に

南　学・漆原順一・斉藤貴子・藤田幸三

一――十年の継続で情報発信
二――「勉強会」から「教育機能」の付加まで
三――「基礎講座」の企画と成功
四――予想以上の学習意欲（アンケートから）
五――「まち研」の今後の「事業展開」

一――十年の継続で情報発信

現存している横浜市の自主研究のグループとしては、「まちづくり研究会」（以下「まち研」）は最長・最古参であると思う。設立は昭和五十五年（一九八〇年）三月から十二年、その前身の「都市問題を考える会」（昭和五十二年就職の職員でスタート）から十五年が経過しようとしている。

この研究会（「まち研」）は、数人の「運営委員」（事務局）が市政・都市問題に関係するテーマを選び、講師と会場の手配をし、会報で知らせるという形態をとってきた。テーマは横浜市の事業に関連することが多く、担当の係長クラスを中心に講師をお願いし、単なる事業紹介にとどまらず、なるべく裏話、問題点や解決の方向に触れていただくことにしていた。このような形態の「定例会」を月に一回のペースで開催し、時には土曜日や休日に現地視察を取り入れてみたり、大分県に出かけて「一村一品運動」を体験したり、韓国、台湾、香港にも足を延ばして海外のまちづくりの研修ツアーを組んだりもした。

定例会には毎回二十～三十人が参加している。会報の送付対象者は現在二百人ほどいるが、なかには一回出たきりで、あとは会報を読むのみという会員もいる。当初市役所の職員だけであったが、他都市や民間企業に勤める人も参加するようになった。一、二年毎に会報送付の希望を確認して名簿を整理しているので、現時点では、二百人の登録会員のうち、一〇から一五％の会員が定例会に参加していることになる。

この「まち研」の活動に参加する利点は、横浜市の主要事業や都市計画・経営について、第一線の担当者の話を聞くことで、幅広く本市の事業や都市問題について理解を広げることができることである。さらに、参加者相互の情報交換で、市役所内のネットワークも広がって、フォーマルにもインフォーマルにも仕事を進めやすくなる点である。

このような研究会が十五年という長い間続いたのは、テーマにしていた横浜市や都市に関する研究がいくら勉強しても尽きることはなかったことと、誰でも、いつでも参加できる参加形態、顧問である田村明法政大学教授（元横浜市企画調整局長）の魅力、さらには常に企画を考え、会場・講師の手配、広報を続けてきた運営委員会の存在であると確信している。

最近では、横浜市はもちろんのこと、他の地方自治体でも職員を中心に相当数の「自主研究グループ」が誕生して、活発な活動を繰り広げ、実際の政策にも研究成果を反映させているものもある。しかしながら、「まち研」が発足した当時は、係長や管理職への昇任試験用の勉強会はあっても、時間外に有志で開催している政策や事業の研究会の存在は、横浜市役所はもちろん、他の自治体でもほとんど聞かなかった。仕事が終わった後（なかには切り上げて参加することも多い）、午後六時半から九時頃まで、酒もなく「勉強」をするのだから、当時は「物好き」程度に見られていたのだろうと思う。

しかし、継続していることの価値はしだいに大きくなり、今では、横浜市はもちろんのこと、全国的にも知られるようになってきた。他都市の「まちづくり研究会」が横浜市役所ではなく「まち研」を訪ねてきたり、現代用語辞典である「イミダス」の都市の項目の解説を担当したり、最近では「赤煉瓦ネットワーク」の母体になったりもしている。情報の吸収を目的にして活動を続けているうちに、一定の情報発信も行うことができてきたようである。

二――「勉強会」から「教育機能」の付加まで

さて、この「まち研」も順調に十年以上の活動を続けてきたわけではない。大体二～三年周期で、参加者が少なくなって組織体制あるいは企画の建て直しを迫られてきたのが実態である。自由に参加できるこの研究会は、気楽に様々な方向に発展することが可能な反面、自由分散的になり、事務局の責任が不明確になったり、企画が「趣味的」になったりもした。

研究会のテーマが絞れていれば、参加者が少ないことや、テーマが専門的になっていくことは自然の成りゆきであると思うが、「まち研」の目的は、幅広く市政や都市問題を考えることと、ネットワークを広げることにあるので、常に定例会のテーマ、参加者の数や構成に気をつかっていたのである。特に参加者が少なくなることは深刻で、その原因と対策のために「再建委員会」を開いて検討したこともあったのである。（時には目先を変えてホテル ニューグランドのマッカーサールームを使ったこともあった。）

再建委員会を開催すると、テーマの選び方、宣伝の方法、運営委員会の体制などを再検討して実行に移し、再び参加者が増えたり、討論が活発になったりもした。このような「再建委員会」を数回開催したが、十年間を経た「まち研」にとって新たな問題が持ち上がってきたのである。

それは、勉強会、あるいは共同研究会としての機能に、教育機能を付け加えざるを得なくなったということである。「教育」というと大変傲慢な言い方になるが、十年の経験をもつ創立当時のメンバーと新入職員とが一緒に勉強会、あるいは研究会を行うには、基礎知識や経験に相当な開きがでてきて、共通の土俵で企画したり議論できないことが多くなったのである。また、かつてとりあげたテーマを再びとりあげることも企画担当者の心理からいっても難しく、例えば新入職員にとって興味のある「みなとみらい21」プロジェクトも総体の計画としてはとりあげられることがなく、水際線の活用や音のコントロールなどの個別テーマとしてとりあげられ、新入職員や事業の経験の少ない職員には理解が難しいといったことも多く見受けられるようになってきたのである。

三――「基礎講座」の企画と成功

このような状況から、十年を経て、初めて「教育的」な企画を試みたのが「もうひとつワンランクアップ講座」であった。結果的には多くの若手の職員を集め、回を追う毎に参加者がクチコミで増え、内容に対しても好評を博して成功裏に終了したのである。

この「教育」講座の設定に当たっての目的は、「地方公務員として、横浜市の職員として基礎となる知識を身につける、もしくは再確認することにより、日常の業務以外のことに関心を持つきっかけとしたり、市政を補佐し、[illegible]つめ、より広い見地に立って[illegible]進め、様々な分野での[illegible]いく」ことにした。

就職[illegible]の数人が、様々な[illegible]

らも、日常的に使っている「起債」や「補助金」といった用語の意味はわかるものの実際にどのように手続きがなされて執行されているのかがわからなかったり、同じ国からの補助金にしても所轄の省庁によって「使い方」が全く違うなど、「実務」や「基礎的な行政知識」に不安を持ったことがきっかけであった。一般的に都市問題や横浜市政を勉強するだけではなく、自分の仕事に役立つ実務としての知識を身につける必要性を感じたのである。その不安感と在職十五年の「中堅」職員の経験と知識が「基礎講座」の基盤となった。

運営委員会のメンバーの中でも比較的経験の浅い（就職後三～四年）メンバーを中心に、彼らが勉強したい内容を話し合い、「中堅職員」が具体的なテーマの設定と講師の目安についてアドバイスする方法によって企画をスタートさせた。特に、アメリカの大学院留学から帰国したばかりの者から、アメリカの大学が地域に向けて継続的な高等教育のプログラムを大規模に、また単なる教養講座ではなく、昇進や昇級に結びつくような専門知識の教育を進めている様子を聞き、質の高いリカレント教育の重要性に着目できたことも大きな参考となった。

数回にわたる夜間の検討会の結果、①入庁一から四年目の職員をターゲットにすること、②毎週一回で八回の連続講座にすること、③今回の講座は第一回目として内容を基礎知識に絞ること、④講師は常に全市的な観点から事業を企画推進しており型にはまらない方を選ぶ、という基本線が確定した。また内容は、題材を事業の実例や現場の本音の中からとりあげて、知らず知らずのうちに必要な知識が身につくようなものとし、受講することによって日々の業務以外のことに関心を持つようになったり、市政を幅広い視点で見つめ、様々な分野でのまちづくりに生かしていくネットワークづくりにも結びつくような観点から、各講師に依頼することにした。このような議論から、次のような呼びかけ文と企画が完成した。（講師の肩書は当時）

「もうひとつワンランクアップ講座」
行政基礎知識講座
横浜まちづくり研究会研修部会

この春、新社会人となって横浜市に入られた皆さま、そして、横浜市職員として何年かを過ごしてきた皆さまへ行政基礎知識講座のご案内です。新人の皆さんはもちろんのこととして、入庁数年の皆さんでもまだ知らない、でも、知っておくととても役にたつ地方公務員、横浜市職員としての基礎知識について体系的に集中して身につける講座を用意しました。この講座では、皆さんが横浜市職員として、また地方公務員として知っておくべきことを身近な実例や現場の本音の中からとりあげて、知らず知らずのうちに必要な知識が身につくようなカリキュラムを組んでみました。この講座を契機として、日々の業務以外のことに関心を持つようになったり、市政を幅広い視点で見つめ、様々な分野でのまちづくりに生かしていくネットワークづくりを目指すことにつながると思います。あっ、それから、係長試験の対策にも効き目があるはずです。

第1回　5月8日　首都圏の中の横浜
講師：中島清氏（横浜市立大学助教授）
第2回　5月14日　自治体とはなにか
講師：田村明氏（法政大学教授・元横浜市企画調整局長）
第3回　5月21日　企画・立案・意思決定とプロジェクト
講師：北村圭一氏（緑政局計画課課長補佐）
第4回　5月28日　予算・経理運用の基礎知識
講師：大澤正之氏（企画財政局高齢化社会対策室長）
第5回　6月4日　国の各省庁の権限と各種プロジェクトの基礎知識
講師：南学氏（総務局国際室ピースメッセンジャー―都市会議担当係長）
第6回　6月11日　区役所のプロジェクト
講師：坂和伸賢氏（港南区建築課担当係長）
第7回　6月18日　知る人ぞ知る、よこはま21プランの読み方
講師：石阪丈一氏（企画財政局企画調整室担当課長）
田沼繁久氏（トーヨコ理研営業課長）
第8回　6月25日　内外ネットワークの巡らせ方
講師：北沢猛氏（都市計画局都市デザイン室担当係長）
南学氏（総務局国際室ピースメッセンジャー―都市会議担当係長）

受講料（招聘講師への謝礼実費）
全回一括　三五〇〇円
今年度新入職員　三〇〇〇円
1回のみ受講　七〇〇円

四――予想以上の学習意欲（アンケートから）

講座に参加したのは六十六人（男五十人、女十六人）で、延べにすると二百四十二人にのぼった。従って一回の講座に平均三十人が出席したことになる。この三十人という数は「まち研」の定例会でもかなり多いほうなので、企画担当者としては初日に椅子が足りなくなったことに嬉しい悲鳴をあげたほどであった。今回の「基礎講座」の成功は、企画が若手職員の自らの学習の要望に沿ってなされたことと、講師の方々が、講座の主旨を理解していただいて具体的な事業を題材に公式的な話を越えて、本音の部分や、「マル秘」的な話も紹介していただいたことによっている。いずれも超多忙な講師の方々が無理をしながら講義の時間を割いていただいたことも含め、本稿を借りて厚くお礼申し上げたい。

今回の講座は初めての試みだったので、今後の参考のために参加者にアンケートをお願いした。主な結果は別図のとおりであるが、今後「知りたい」、「勉強したい」といった興味の対象は都市問題や市政一般、国際交流のほか「他都市のまちづくり」も要望が多かった。一方、今回の講座の内容が「市政の光の当たっている分野が多く、もっと影の分野にも目をむけて欲しい」という意見もあった。また、個人の資質によるところも大きいが、局にいる職員と区役所にいる職員とでは、市政全般についての情報量に格段の差があることに驚いたという声も聞かれた。

新入職員には、「事業の苦労話が参考になった」、「都市づくりの仕事を通して市の仕事の一端を見ることができた」というように、市の仕事のバラエティと実際に仕事を進める様子が理解できたようであった。三年以上の経験をもっている職員には、個別の講義を通して、「地域住民を巻き込んでの事業の進め方が参考になった」、「自分の考えをどうやって上司にOKをもらうのかという仕方が面白かった」「ネットワークの大切さがわかった」「区役所というと決められた住民サービスで手一杯という感じがするが、こういう活動の仕方もあるのかと思った」など、自分の仕事上の壁を突破する方法や、これまでには思い付かなかった事業の展開方向について参考になったようである。

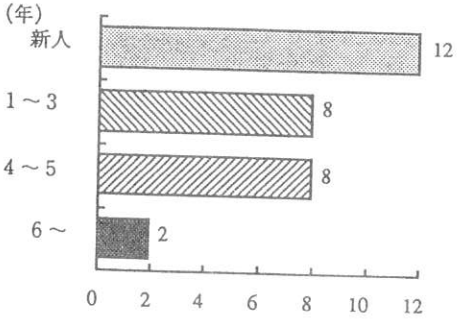
アンケートに共通していたのは、「講師の個性が魅力的」とか、「講師の話がうまく楽しく受講できた」という点で、「この講座を知ったのが最終回直前なので一回しか参加できなかったが、今後同様な企画があれば参加したい」という声も合わせてこの種の講座への期待の高さがうかがえた。

新入職員の相当数が区役所に配属され、比較的ルーティン化された仕事と、少ない情報と予算のもとで三年以上過ごすうちに「市役所の仕事はこんなもの。話題になるようなプロジェクトは雲の上」というような意識を持つ傾向があるのも事実である。こうした傾向に対して、今回の講座は少なくとも多少元気の良い職員（講師）が、「雲の上の」プロジェクトに深くかか

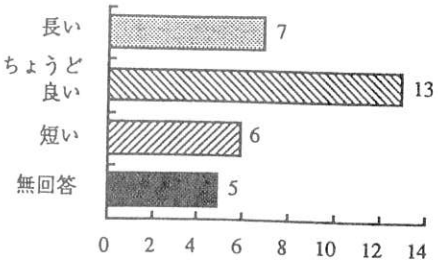
図－1　在職年数

図－2　8回連続講座は

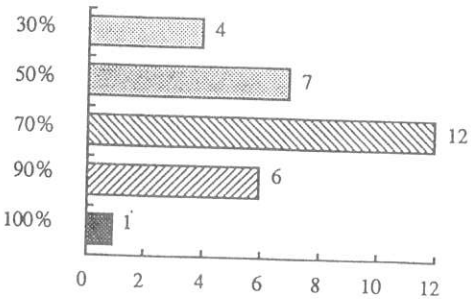
図－1　在職年数



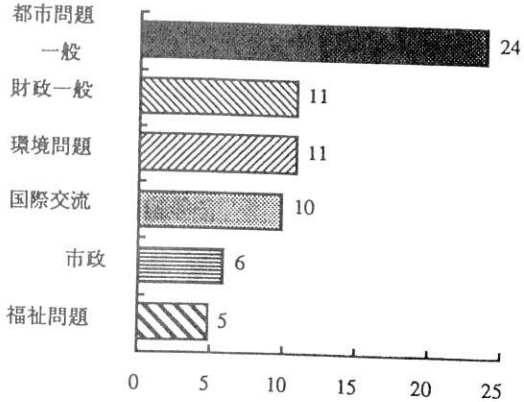
図－2　8回連続講座は



図－3　講座の理解度



図－4　勉強したい分野（複数選択）



わっていることを示すことができた点でも効果があったのではないかと考えている。公式的なプロジェクトの紹介では説明が理路整然としていて、その事業にかかわった職員の姿が見えてこないことが多い。そして、市役所としてのオフィシャルな研修は公式的な紹介にとどまることが多い傾向にある。自主研修として行政にかかわる基礎知識の講座を行うことに当初は若干の疑問を持っていたのだが、実は必要であることが証明できたような気がする。

もう一つの成果は、受講生の感想で一番多かったのが、「人と人とのネットワークの大切さがわかった」というものであった点である。これは「まち研」の設立主旨でもあり、これが伝わったことで「まち研」としての成果も大きかったといえる。

五――「まち研」の今後の「事業展開」

今、「まち研」は十年の経験を経て大きな三つのプログラムを持つことができた。第一は、これまで続けてきた「定例会」であり、市政や都市問題の様々な側面をその時々のキーワードで勉強し、幅広い知識と人間のネットワークを創ることで、中級編といえるであろう。この企画は市政に関連する事業を題材にしたいわゆる「ケーススタディー」であり、ある程度の専門用語や概念が解説なしに出てくることが多いので、議論に参加するには一定の基礎知識をもっている必要がある。もちろん、聞いているだけでも日頃の仕事に大変参考になるはずであるから、新入職員や経験の浅い職員でも参加できる。むしろ、月に一回程度なので、気楽に参加できるかもしれない。

第二は中堅職員や専門家と若手の職員をつなぐ「基礎講座」の実施であり、基礎編といえる。本稿はこの「基礎講座」の紹介が主旨だったので解説は不要であろう。

第三には、「赤煉瓦ネットワーク」の母体となるような、経験と知識を生かして「まちづくり」を楽しみながら、具体的な施策へのステップを進めるネットワークを創ることで、いわば上級編といえるであろう。この上級編になると、日頃の「まち研」のネットワークを生かして自分達のやりたいプロジェクトを組むことになる。冊初の取り組みは昭和五十七年の「国連アジア・太平洋都市会議（YLAP）」への参加であった。実行委員会に参加しつつ、勉強会を開いたり、各国・都市の参加者と積極的に交流を図った。根岸の競馬場跡地の利用を考えたり、夏の夜を飾った「ヨコハマフラッシュ」も「まち研」のメンバーが中心となって活躍した。用語辞典「イミダス」における都市問題に関する用語解説もいまは大きな仕事となっている。これからは、「まち研」の中堅メンバーが中心となって市の事業のいくつかが幅広い視点で取り組まれていくものと思う。

「まち研」に一定期間参加していると様々な分野のエキスパートと個人的にも親しくなり、お互いに情報交換や助言を行うことができるようになる。都市デザイン、国際交流、文化イベント、福祉、区役所業務といった分野別のつながりと、MM21、港北ニュータウン、副都心整備、港湾、公園、道路といった事業別のネットワークもできて、電話一本で横浜市の主要事業の様子がわかるようになるからである。いまの市役所の体制では、政策研究をしてもそれが事業に直接生かされることは少ない。むしろ、事業の担当者が自主研究のなかで幅広い視点とネットワークをもつことの方が結果的に施策に反映される可能性が高いといえるであろう。

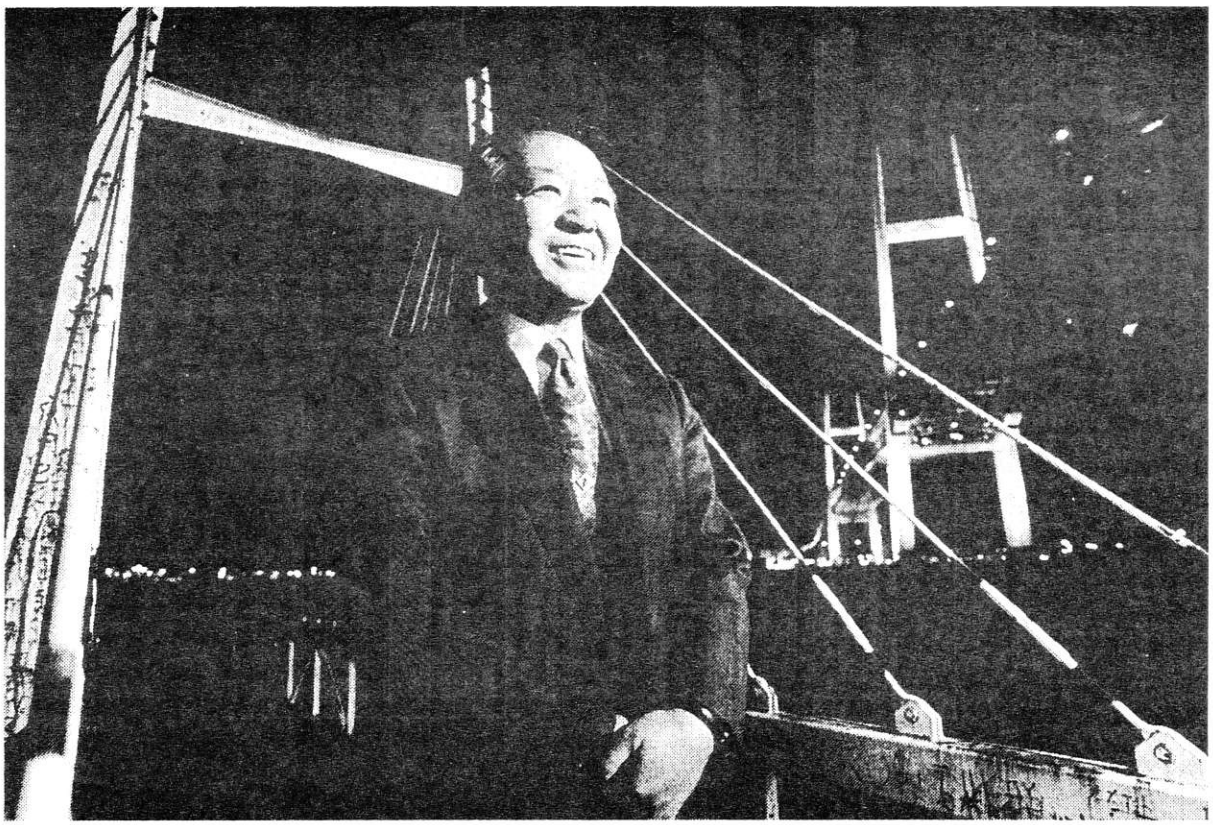
その意味で、「まち研」の初級、中級、上級は上下を意味しないが、それぞれに戦略をもって進める必要があると考えている。

最後に、「まち研」で一九九七年のBig Wave（中国への返還）についてどう考えているか。」とメンバーが尋ねた時の、香港政庁の局長の確信に満ちた言葉で「まち研」の主旨を伝えたい。「人がそこにいるかぎり、まちは生き続ける。従って、我々の仕事にも終わりはないのである。」この終わりのないまちづくりを楽しむのが「まち研」である。

〈南＝市立大学事務局総務課調整担当係長／漆原＝都市計画局㈱横浜みなとみらい21／斉藤＝港湾局経理課経理第二係／藤田＝都市計画局再開発課〉

かながわ 100人の肖像

田村 明さん(68) 都市プランナー



横浜市鶴見区大黒ふ頭で

ハマの再生にかけた「自治体の応援団」

原風景は港だった。気乗りせず下見に来た、ホテル・ニューグランド裏の公団住宅八階から見おろす眺めは、さまよえる三十六歳の心を奪った。「こんな近くに港が、船が、公園がある。あの感激があったから横浜の歴史と個性を生かす都市づくりにとりつかれた」。今も変わらぬ横浜への愛着の原点だ。

運輸省に一年半、建設省は三日。「権威主義とタテ割りがどうしても嫌い」で、五つの省庁に入っては辞めた。大阪の生保会社にも約九年勤めたが、仕事に満足できぬ夫を妻真生子さんは気遣った。天職を探し求めていたとき、「総合的に考える仕事ができる」と東京の地域計画会社「環境開発センター」に参画した。転職に伴う家探しで、偶然横浜を訪れたのだった。

■

センターで、「重病」の横浜市を再生する「六人プロジェクト」を提案した。実現にはつくった張本人をと、二期目の飛鳥田市政に招かれた。一九六八年、四十一歳だった。都市の時代、革新自治体の時代である。「タテ割り縄ノレン行政」を横断する企画調整局の局長などとして、役所を大きく揺さぶった。八十島義之助東大名誉教授は「発想と、具体化する力を兼ね備えた希有(けう)な人」と評価する。

中央省庁と衝突した。「国と議論して負けたことはない。市全体をどうするのか、国には考えられない。法律や補助金では仕事にならない」。中心街や大通公園の上を高架で走ると国が決めた高速道路を「景観を損なう」と粘り腰で地下化した。

■

ベイブリッジも現在のみなとみらい地区も、このプランナーが種をまき、育てた。伊勢佐木町や海岸通りの都市デザインにも取り組んだ。「まちづくりは市民の共同作品」が口癖だ。

華やかな事業の陰で、エネルギーの七割をつぎこんだのが、急増する宅地開発など土地利用の調整だった。「ものすごく悪いのを、少し悪くする仕事。全員が望みながら、全員にとってマイナスという乱開発の矛盾の克服に苦心した」という。

会議では、百八十巻四方の特注製図板を数十人が囲む中、若い担当者の意見をどんどん聞いた。広げた図面にトレーシングペーパーを重ね、それぞれの考えを書き込んでいくと一時間で十枚にも達した。「大テーブル主義」である。

■

論争相手に食いついたら離さぬ粘り強さで「坊っちゃんマムシ」の異名をとった。理に勝った印象が必ずしも好かれないのが日本だ。この道一筋の「行政のプロ」といったタイプを尊敬する市議は、議会全員協議会で「田村教授、講義はやめろ」と紙に大書した。企画調整部門に権限が集中し、「田村天皇」のお墨つきなしには何もできぬともいわれた。

細郷市長誕生の三年後、法政大教授に。十三年間いた市役所を去る前年に市職員有志が始めた「まちづくり研究会」の月例会に今も毎回顔を出す。若い世代と語り合い、飲み明かす。

「自治体の応援団」として、全国を回っては横浜での実践を熱く語る。藤沢市の審議会で都市景観条例を答申し、逗子市の懇話会で環境条例を提案するなど、名指南役でもある。

数年前の大病もものかは、今年は七回海外に渡った。旅先では歩き回って写真を撮りまくり、屋台に必ず立ち寄る。つきてやまない好奇心と、それを支えるエネルギーは健在だ。

文・山口 進
写真・河合真人

田村（たむら）明（あきら）さん（68）

都市プランナー

発行日　1995年4月15日
発行者　横浜まちづくり研究会
編集者　南学　漆原順一　加藤美奈　坪井聡
表紙デザイン　田口俊夫

まちづくり

まちづくり研究会

1995年4月

1980～1995

発行：まちづくり研究会
運営委員会